

生誕百五十年記念誌

# 本多静六

— 森と公園を愛した人 —





本多静六の生家・折原家（昭和18年頃）

大学教授時代の本多静六（大正10年頃）



# 生誕百五十年を記念して

本多静六博士を顕彰する会会長 柴崎 一

本多静六博士（以下「博士」）が慶応二年（一八六六）七月二日、武蔵国埼玉郡河原井村（現久喜市菖蒲町河原井）で生を受けてから、平成二十八年で百五十年の節目の年を迎えました。

これを記念し、本多静六博士を顕彰する会（以下「顕彰する会」）では、生前に博士が残された数多くの功績を称えらるとともに、これらを顕彰し後世に伝えるため、記念誌の発行を企画しましたところ、多くの皆様よりご賛同、ご協力を賜り実施することになりました。

博士は、私たちに数多くの人としての在り方、大きくは国土の保全、人間が生活していく上での健康に必要な自然環境の重要性など、数々の教訓を残されました。

特に印象深い教えとして、「いやしくも木が二本以上並んでいるところは林の字であり、人間が初めて地球上にあらわれた時代から樹木でおおわれ、人類と樹木は切りはなすことができない深い関係にある。住居や日常生活で使う楊枝に至るまで樹木の恩恵を受けている。人類にとって必要とする酸素の浄化を含め、人間が快適な生活を送るための必須の条件とは、森林との共生にある。」などがあります。実は、

造けい深い教えが印象深く残っています。

顕彰する会では、これらのことを含め、生誕百五十年を節目として多くの皆様に広く、深く博士の人となりを含め知って頂ければと願っています。このような意味合いから、この記念誌が顕彰の大きな支えとなり、力となれば幸いです。顕彰する会も全国的な組織として、更なる顕彰を重ねお役に立ちたいと思っております。

顕彰する会の活動内容につきましては、毎年発行しております「本多静六通信」をはじめ、久喜市のホームページをご参考にして頂ければ幸いです。

このたびの生誕百五十年記念誌を通じて、博士の意図するような、森は地球を守る上から大切な役割を担っていること、さらに地球温暖化防止のための貴重な指針を教授してくれていること、これらの教えを肝に銘じ、これからの顕彰活動の指針として受け止めていきたいと考えております。

結びに、顕彰する会の活動と記念誌の刊行にあたり、その趣旨にご賛同を賜り玉稿を賜りました皆様、また、企画編集にご尽力を賜りました皆様、印刷製本に格別のご高配を頂きました皆様に深甚なる謝意を表しお礼の言葉とさせていただきます。

# 発刊を祝して



久喜市長 田中暄二

本多静六博士生誕百五十年記念誌の発行にあたり  
ごあいさつ申し上げます。

本多静六博士を顕彰する会の皆様におかれましては、本多静六通信の発行やゆかりの地訪問、三崎の森公園内の本多静六博士の森の管理などにご尽力をいただいておりますことに、心より感謝を申し上げます。

本多静六博士は、日本で最初の林学博士となった方ですが、御尊父の急逝や留学期間の短縮など、そこに至る道のりは決して平坦なものではなく、博士自身の努力によってその道を切り開いてきました。その思いが「人生即努力 努力即幸福」という博士の言葉にも表れているのだと思います。

本市では、博士の業績を紹介するため、さまざま  
な取り組みを行っておりますが、そのひとつとして  
小学生を対象とした副読本「日本の公園の父 本多  
静六」を発行しております。本のなかでは、博士が  
日本各地の公園設計に携わったことや、自身の持つ

苦学の経験から所有する山林を奨学金制度の創設を  
条件に寄附したことなどを紹介していますが、この  
本を読んで博士の偉業を知った子どもたちの中から、  
将来、第二、第三の本多静六博士が誕生することを  
期待しているところでございます。

さらに本市には、本多静六博士没六十年記念事業  
で整備した本多静六記念館が菖蒲総合支所内にござ  
います。記念館には、博士の直筆の資料や遺品など  
の貴重な資料をはじめ、日本初の洋式公園である日  
比谷公園の模型や写真など、様々な資料を展示して  
おります。また、企画展として、これまでに「秩父  
の山林」や「妻銚子・養父晋」をテーマに開催して  
きました。生誕百五十年にあたる今年度は、博士の  
人生哲学がわかる「人生訓」をテーマに取り上げた  
ところでございます。

今後、本多静六博士を顕彰する会の皆様と連携  
しながら、博士の功績を全国に広めるための事業を  
引き続き行ってまいりたいと考えております。

結びに、本多静六博士を顕彰する会の益々のご発  
展を心からお祈り申し上げます。お祝いの言葉と  
いたします。

## 目次

○生誕百五十年を記念して

本多静六博士を顕彰する会会長 柴崎 一…1

○発刊を祝して

久喜市長 田中 暄二…2

○発刊に寄せて

埼玉県知事 上田 清司…3

点描 本多静六

特集1 お茶の水女子大学名誉教授 遠山 益…4

日本最初の大学演習林「千葉演習林」

特集2 東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習

林千葉演習林 助教 當山 啓介…8

明治神宮 未完のプロジェクト―森と水の

循環を求めて―

特集3 明治神宮国際神道文化研究所主任研究員

今泉 宜子…12

科学者本多静六の業績

特集4 国立研究開発法人森林総合研究所森林植生研

究領域長 正木 隆…18

日本の自然、日本の風景―中部山岳国立公

園を仰ぐ本多博士の視点―

特集5 奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研

究員・国際日本文化研究センター共同研究員

岡本 貴久子…22

本多静六を支えた人々―妻銚子と養父晋、

白石昌字と愛弟子本郷高德―

特集6 久喜市立郷土資料館担当主査兼学芸員

栗原 史郎…26

# 発刊に寄せて



埼玉県知事 上田 清司

本多静六博士の生誕百五十年記念誌が発刊されますことを、心からお祝い申し上げます。

博士は、本県を代表する偉人のひとりであります。明治三十二年日本初の林学博士となり、造林学、造園学の確立に大きな足跡を残しました。

明治神宮の森の造営、日比谷公園、大宮公園、北海道の大沼公園などの全国各地の公園の設計や改良、六甲山の復活、鉄道防雪林の創設による鉄道の地吹雪対策など博士の功績は全国におよび、多岐にわたっています。

これらの多くの功績の陰には様々な困難があったことが伝えられていますが、それが博士の業績の偉大さを際立たせています。

一方、帝国森林会、日本庭園協会を創設して会長に就任したほか、埼玉県人会副会長、埼玉学生誘掖会及び埼玉学友会の会頭として郷土埼玉県の発展のために御尽力いただきました。

また、次代を担う子供たちの育成にも尽力されました。子供たちが経済的な理由で進学を断念することのないよう、学生を援助する育英財団を作ることなどを条件に所有する森林を県に寄付されました。

県では、博士の御意志に従い森林の立木売り払い収入を基に、「本多静六博士育英基金」をつくり、奨学金として学生の就学を支援してまいりました。

私も十年後を見据えた「人財の開発」に取り組んでいます。少子高齢化により生産年齢人口の減少が見込まれる現在、県民一人一人の個性や能力が最大限発揮できる社会をつくる必要があります。特に博士や洪沢栄一翁が海外留学によって我が国に多くの益をもたらしたことを考えれば、若者が大きな視野を持つために海外で様々なことを学ぶことが極めて重要であると考えます。第二の本多静六博士の誕生を期待し、引き続き、グローバル人材の育成を積極的に進めてまいります。

結びに、この冊子をとおして、本多静六博士の精神がより多くの皆様に受け継がれることを、心から祈念いたします。お祝いの言葉とさせていただきます。

◎ 洪沢栄一と本多静六  
洪沢史料館館長 井上 潤……………32

◎ 日比谷松本楼が今に伝えているもの  
日比谷松本楼社長 小坂 哲郎……………34

◎ 学習まんがの制作を通して感じたこと  
漫画家 比古地 朔弥……………36

◎ 本多静六博士が埼玉県に遺してくれたもの  
— 本多静六博士奨学金と本多静六賞を通じて—  
埼玉県農林部森づくり課主査 山崎 宏剛……………38

◎ 埼玉学生誘掖会の思い出 — 市ヶ谷砂土原  
で学んだこと —  
講談社社友 長谷川 清……………40

◎ ようこそ本多静六記念館へ  
久喜市菖蒲総合支所 副支所長 渋谷 克美……………42

◎ 本多静六博士と子どもたち  
久喜市立三箇小学校……………44

◎ 生誕百五十年記念誌の刊行に寄せて  
湘南工科大学 准教授 本多 博彦……………45

◎ 本多静六博士を顕彰する会の歩み  
本多静六博士を顕彰する会 会長 柴崎 一……………46

○ 表紙及び裏表紙の写真については、  
本文48頁をご参照ください。

## 点描 本多静六

お茶の水女子大学名誉教授 遠山 益

### 一 はじめに

慶応二年（一八六六）生れの本多静六は、今年（平成二十八年）生誕百五十年にあたるというので、関係各地の団体では、それぞれイベントや記念計画が進行中である。本多は幸せ者である。恐らく草葉の陰で喜び感謝していることだろう。

### 二 本多静六点描

平成十六年からわずか三年ばかりの間に本多静六に関する本が十冊刊行された。そのうち九冊は本多自身の著作本で、いわゆる復刊本である。この復刊本ブームが起こった理由は、死後五十年経過したことで、本多の著作権の保護期間が消滅したこと、もう一つは物質文明万能の今日でも、本多の人生哲学に共感する読者がいたことによる。この復刊本ブームで本多の名は少し世間に知られるようになったが、彼の知名度は特定の分野に限られていた。一般市民の間では本多を知らないのが普通であり、知っている人の多くは、本多の「蓄財の神様」あるいは「人生成功の指南役」という別称によるものであった。しかし、これらは本多にとって余技であり、彼の

教授であった。教育者として多くの優秀な子弟を世に送り出し、自らは研究者として「本多造林学」の大著二十二冊を完成し、造林という実業を体系化して造林学にまで高めた。

他方、本多は「象牙の塔」に立て籠もる読書三昧の学者先生ではなかった。実学を重んじ、学外に出て世のため人のために貢献することを喜びとした。しかし、造林や造園は地味な分野で、泥と汗の臭いがしみ込んだ職種で、華やかなマスコミ界に登場して自己宣伝できるような職業ではないが、国民生活の基盤を支える重要な分野である。例えば、鉄道防雪林の創設、水道水源林の育成、日比谷公園の開設、明治神宮の森づくりなど、本多が手掛けた社会貢献が、現代の国民生活に深くかかわっていると認識できらるだろう。

本多は天才肌の人間ではなく、私どもとあまり変わらない普通の男性のように思われる。普通人と決定的に異う点は、彼は八十五年の生涯を通して、努力一途に生き抜いたことだろう。その努力は半端ではなく、異常とみえる程の、私どもにはとても真似のできない程度であった。人生の成功や幸福は努力による以外では得られないとする彼の人生哲学は、

今日でもなお貴重な教訓である。本多の努力の一面を紹介する前に、彼のドイツ留学について記述する。

本多は東京農林学校（東大農学部的前身）卒業と同時に、正確には卒業三ヶ月前に、ドイツのターラント山林専門学校に入学するために出発した。留学先をここに決めたのは、恩師の志賀泰山教授の紹介による。彼もまた五年前にここに留学していた。林学だけ学ぶのであれば、ここで充分であったが、本多は博士号を取得したい強い希望があったから、ターラント滞在は半年でミュンヘンに移り、ミュンヘン大学国家経済学部に移学した。

ミュンヘン大学の林学は国有林経営を担当する技術者の養成を主目的にしていたから、林学は経済学と共に国家経済学部所属したのである。本多の博士論文（独文）のタイトルは「山地の高度差が材木の生長の変化に及ぼす影響」（和訳）であるが、博士号の名称が国家経済学博士なのはこのためである。後述する本多の恩師中村弥六氏もまた本多に先立つこと十年前、明治十五年（一八八二）にミュンヘン大学で同じ博士号を取得している。

博士号取得には論文審査、口述試験、口答発表の

本多の恩師松井直吉が植えたカラマツ  
(東大北海道演習林) 富良野市



本多による第1期砂防造林計画で植林した松林 (神戸市再度山)



本多が改良設計した若松城公園 (現会津鶴ヶ城公園)



本多の設計による大濠公園 (福岡市中央区)

厳しい三つの関門を通過しなければならぬ。論文は知人に読んでもらい、文章も訂正して提出し、難なく通過できたが、難関なのは口述試験と口答発表であった。

これらの試験に本多は切腹する覚悟で臨んだという。ドイツ留学に際し、義父は「わが家の存亡はお前の勉強一つにある。ついてはわが家代々の宝刀を餞とする」とて静六に日本刀を与えた。これは学成らずば潔く切腹せよとの意味と静六は受け取っていた。いま緊張と疲労でいまにも折れそうな心身に鞭打って、「もう一度死力を尽くしてやってみよう。切腹はいつでもできる」と気を取り直して再び努力を開始して試験に臨んだ。

口述試験では、居並ぶ教授連の質問を通過して、最後は意地悪との評判高いブレンタノ教授は、本多を落第させようとする質問を連発して、心底から閉口した。しかし、教授会の総意でこの関門も通過できた。最後は口答発表である。本多は連日近くのイザー川の滝の下に立って、大声で口答発表の練習を繰り返した。二月のドイツの冬は寒く、イザー川岸には三尺(約一メートル)の雪が積もっていた。近所の人々は気の狂った東洋人がわめいていると評判になり、本多は「東洋の奇人」と呼ばれた。学内の教職員や学生が集まった講堂での論文発表と質疑応答も大きなミスがなく終了した。

こうして、命をかけた学位取得の戦いは終わり、本多は晴れてドクトルの称号を得たのである。後年本多は「ドクトル取得前の苦難に勝る苦難はなかったが、取得後の喜びに勝る喜びもなかった」と回想

している。

ドクトル取得に比べると、日本の林学博士の取得など、物の数に入らないと本多は言う。ドイツから帰国後明治二十五年（一九二二）本多は農科大学第二講座（造林学）の助教授に就任した。明治三十一年（一九一八）学位令の改定があつて、従来の法文理工医の五種に新たに農林獣医薬の四種が追加されて、計九種の学位となつた。

林学科では教授は申請するだけで博士号を取得できたが、助教授以下の人は論文の提出が求められ、本多は数年前からまとめつつあつた「森林植物帯論」を提出した。第一回の林学博士取得者は五名で、その第一号は中村弥六、次いで志賀泰山、川瀬善太郎、本多静六、河井鋪次郎の順である。本多の学位記番号は四号である。

近年関係自治体や団体が、あるいは個人の立場で本多静六の宣伝普及に努めた結果、彼の人と成りと業績が多くの人々に知られるようになった。このことと連動して本多の植林、造林・造園などのほか成功物語などの図書文献が沢山出回つて、容易に入手できるようになった。そこで筆者は「もう少し知りたい本多静六のこと」の立場から、本多の大道から外れて、彼の人間相手の人間くさい分野に関する諸問題を考察してみたい気持ちが湧いてきた。

例えば、①本多はなぜ政治・行政畑に転身しなかつたか。②本多の博士論文の内容と評価。③本多が華族や富豪に林業経営を勧めた理由。④本多が蓄財に努力した本多の理由。⑤本多も失敗や迷惑が少なくないこと。⑥その他。これらの詳細は他の機会に

ゆずるが、今回は本多が政治や行政畑に転身しなかつた理由について、その大筋を記してご参考に供したいと思う。

### 三 政界・行政畑への勧誘

功成り名遂げた学者先生が、政治や行政の分野に転身する人は珍しくない。転身後の活動状況は各人それぞれである。本多もまた造林や造園の分野で指導的地位を確立し、何程かの資産も蓄えた五十歳代に、政治行政への勧誘は一度ならず経験した。勧誘者は後藤新平（一八五七―一九二九）であつた。

彼は岩手県水沢藩士の家に生まれ、長じて福島県須賀川医学校を卒業した医師であつた。内務省衛生局に入り、ドイツ留学生としてミュンヘンにやつてきて、本多と初めて面接した。「ブレンタノ教授の講義を聞きたいから紹介してくれ」という。財政学を聴講する理由を尋ねると、「おれは医者だが、個人の病ではなく国家社会の病を治す医者をめざしている」という。後藤もドクトル・メジチネ（医学博士）の学位を取得して衛生局にもどつた。

その後、衛生局長から台湾総督府民政長官へと出世した。台湾在職八年半の間に、植民地行政に独創的な卓越した手腕を発揮した。この時も「台湾に来て行政を手伝ってくれぬか」と本多に申し入れた。後藤の実績は高く評価されその後内務大臣、外務大臣などを歴任した。後藤は大言壮語した通り、政界で大発展を遂げた。

この頃北里柴三郎が本多に言うには「後藤がいつも君のことを尋ねているよ。本多は相変わらず糞勉

強を続けているようだが、あいつももう少し利口だと立派な政治家になれるのだが・・・」。当時北里・後藤・本多の三人は交流を深め、時折会合を開いていたようだ。

関東大震災（一九二三）後、後藤は内務大臣兼復興院総裁として、「本多君至急帝都復興計画書を作成してくれ」といつてきた。「私は専門外で、政治屋にはなりたくないからお断りする」といつたが、聞き入れなかつた。「以前君が話してくれたバルセロナの都市計画を見本にすればいい」という。作成した骨子案を後藤に渡したものがあの四十一億円の大計画案で、「後藤の大風呂敷」案といわれた。これは次第に縮小されて十三億円になった。今にして思えば、後藤の大風呂敷を存分に広げさせてやれる程日本は大国に成長していなかつたことは残念である。ちなみに、再三首相候補の下馬評にさがりながら、ついにその地位にはつげなかつた。

### 四 政界・行政畑に転身しなかつた理由

(一) 本多自身の明哲保身の人間性による。苦学を乗り越え、人並外れた努力で勝ち得た地位と名誉を、安易に捨てることはできなかった。なるほど政界は知名度も収入も拔群であるが、保障はない。本多はいつの間にか「明哲保身の術」を身につけたようだ。学者が政界などに転身して徒に敵を多くすることは得策ではない。本多は少壮教授の頃、周囲に迷惑をかけ、敵をつくつて、教授会で辞職勧告された苦い経験がある。

(二) 北里柴三郎博士の助言による。本多は帰国の途

上北里に出会った。サザンプトンからニューヨークへの七日の船旅の間、一回り以上も年長で、ロバート・コッホ博士の下で画期的な成果をあげ、当時世界的な細菌学者であった北里からいただいた種々の教訓は、二十歳代の本多にとって掛け替えのない貴重な助言であった。後年、後藤新平を交えた会合でも「……だがなあ本多君。政治は後藤君にまかせておいて、俺達は糞勉強をやり通そうよ。何でも大器は晩成だ。急ぐには及ばんよ」と北里は語りかけた。

(三) 政界に転身した中村弥六の哀れな人生の末路を目の当たりにしたからである。中村は東京農林学校の恩師であり、本多の縁談の恩人でもある。中村は信州高遠の出身で、幼少の頃から秀才の誉れが高く、長じてミュンヘン大学に留学して林学を学び、東洋人として初めてドクトルの称号を得た。農商務省で働いたが、林業振興に熱意のある官吏がいないので、愛想を尽かして退職した。

たまたま明治二十三年（一九一〇）第一回衆議院議員総選挙が行われることになったので、中村は長野県から立候補して当選した。二十七年間の議員生活中に中村の運命を左右する事件が起こった。それは「布引丸沈没」事件である。フィリピンの独立運動を支援するため、多量の武器弾薬と船を調達して、秘密裏に出航したが東シナ海で沈没した。この事件は国内のみならず国際的事件に発展し、中心人物の中村は「国際詐欺師」「裏切り者」の汚名を着て、新聞雑誌で槍玉に挙げられた。中村は沈黙を守った。大正六年（一九一七）政界を引退したが、多額の負

債を負い生活は苦しかった。見兼ねた漆山雅喜、川瀬善太郎、本多らが中心になって拠金し、国府津に寓居を求めて贈り、生活費を支援した。中村はこの地で七十五歳の生涯を閉じた。

再三にわたる勧誘に対し、本多に動揺がなかったとはいえないが、これを思い留まらせた最大の理由は、恩師中村弥六の晩年の生活を身近にみたことである。最後に「当世策士伝」のなかの中村弥六の項の一節を引用する（現文のまま）。「……若し彼が林学博士として学問を以て世に立ったならば、たとひ華やかならずとも、一生を誤らずに済んだかも知れぬが、さる無味単調なる生活を送るには余りに覇気と策が有り過ぎた。……」

## 五 おわりに

本多は二十六歳で大学に職を得たとき、第一教諭期（六〜二十歳）から第四楽老期（八十六〜百二十歳）までの人生計画表を作っている。本多の生涯を回顧すると、この設定期間と内容をほぼ実践した見事な一生であった。人間は働学併進に努め、職業や仕事を道楽化し、慢心、贅沢、名利を慎めば必ず百二十歳まで生きられると豪語していたが、こればかりは思い通りにならなかった。

著者は「本多は私どもとあまり変わらない普通の男性のように思われる」と前述したが、ここに本多自身の自己分析の弁を紹介して筆を擱く。「……私は老来自分のことをしゃべり過ぎ書き過ぎた。しかもそれには幾多の過失や失敗、その他都合の悪い事は一切後回しにしてきたので、何も知らない世間の

人々は、実際以上に私を買い被って、過褒<sup>かほう</sup>の言すら送って下さることが多くなった。……中略……この上は過去の欠点過失はそれとして、ありのままを正直に発表して、本多もやはり平々凡々な一人の人間でしかなかった。ただ割合に長生きをして広く世間をみ、人生の体験を積んで来たというだけのこと、これを皆さんによく知って頂きたい。

世間には本多以上に人生に深い体験をもつ人はいくらでもいる。ただその人たちは私のように虚名を馳せていないため、したがって偽善者でないため、その短所欠点をかくさなかつたので、世間ではその人を実質よりマイナスして見過ぎている。そういう人々が本多よりはるかに偉いのである。……」  
今日に生きる私どもは、本多静六を偶像化や神格化することなく、ありのままの本多を広く世間に知らせることが真の顕彰であろう。

### 参考文献

- 1 本多静六・本多静六体験八十五年・昭和二十七年・講談社
- 2 本多静六・本多静六自叙小伝（上中下）・サンデー毎日・昭和二十四年
- 3 武田正三・本多静六伝・昭和三十三年・埼玉県立文化会館
- 4 遠山益・本多静六日本の森林を育てた人・平成十八年・実業之日本社
- 5 大日本山林会編・明治林業逸史（前・続）・昭和六年
- 6 日本林業技術協会編・林業先人伝・昭和三十七年
- 7 中村賢太郎・本多静六先生の思い出・「山林」八一四〇号・昭和二十七年
- 8 鶴崎鷺城・当世策士伝・大正三年・クレス出版
- 9 小島直記・日本策士伝・平成元年・中央公論社
- 10 埋橋桑人・学者としての中村弥六「伊那路」昭和六十年三月号・高遠町図書館
- 11 埋橋桑人・政治家としての中村弥六 右同七月号
- 12 森下正夫・布引丸事件の真相・平成六年・高遠町図書館



## 日本最初の大学演習林「千葉演習林」

東京大学大学院農学生命科学研究科  
 附属演習林千葉演習林 助教 當山啓介

### ■東京大学千葉演習林とは？

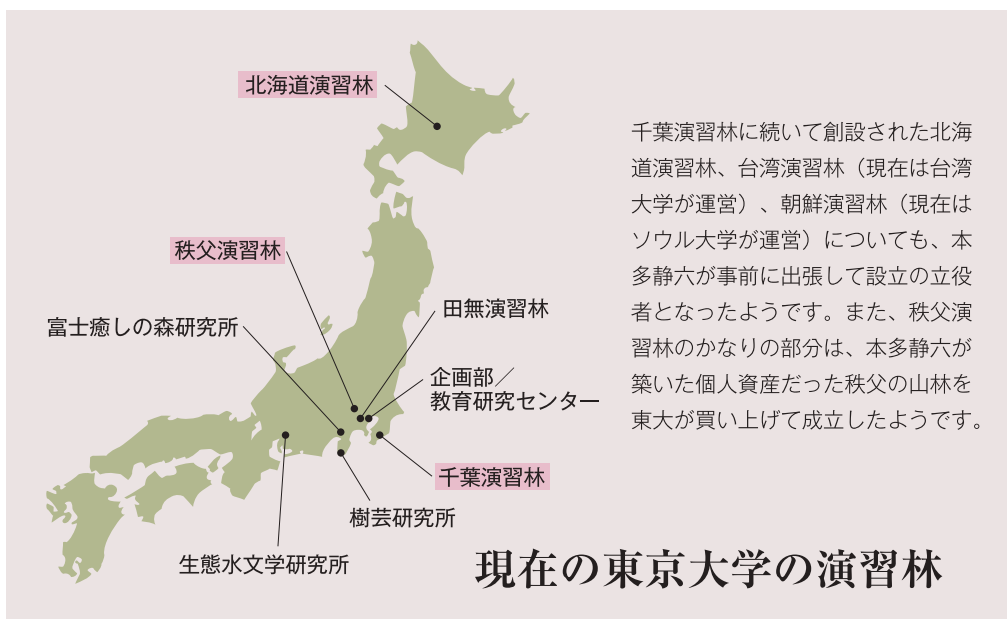
東京大学千葉演習林は、千葉県の鴨川市と君津市にまたがる広大な森林を管理する東京大学の附属施設で、本多静六の尽力によって明治二十七年（一八九四）に創設された日本最古の大学演習林です。

演習林とは、森林や林業について教える大学等の教育機関の森林のことです。東京大学の演習林は千葉演習林を含めて現在七カ所にあり、日本の国土のおよそ〇・二パーセントを占めています。戦前には海外演習林（台湾、朝鮮、樺太、海南島など）もあり、さらに膨大な規模を誇っていました。その中の千葉演習林は、東京大学そして日本全体の大学演習林のうちで最初に創設されました。なお、千葉演習林と呼ばれるようになったのは比較的新しく、以前は「千葉縣（県）下演習林」や「千葉縣演習林」、また中心地域である清澄（千葉県鴨川市。日蓮宗大本山の清澄寺があり、一帯を清澄山と呼びます）にちなんで「清澄演習林」「清澄山演習林」などとも呼ばれていました。そのころは東大も「東京大学」ではなく「帝国大学」や「東京帝国大学」でしたが、本稿では現在の呼び方で示します。

### ■千葉演習林の創設と本多静六

創設のきっかけは明治二十五年（一八九二）十二月に、東大の農科大学（今で言う農学部）の助教であった本多静六が学生九名を連れて房総半島の視察旅行を行ったことでした。ドイツ留学から帰国して間もない本多は、林業が国を支える重要な産業となることや、近代的な林学教育において森林の現場を持つ重要性をよく知っていました。清澄にある浅間山に原生に近い見事な天然林が残されていることや、周辺の貴重な森林環境を観察し、かねてから構想のあった大学演習林としてこの地域が適切であると考えた本多は以後、千葉演習林創設を大学等に働きかけていきます。

なお、このように千葉演習林創設のきっかけともなった浅間山は、天狗が棲むなど様々な言い伝えがあるため、伐採禁止の山として地元の人々が大切にしてきた山で、もちろん演習林となっても保護を続けてきました。ちなみに先述の一八九二年の視察旅行の際にわずかな本数のモミやツガの木が標本として伐採・採取されており、「歴史上最後の伐採」と語られています。伐採夫（杣夫）として作業を担当した清澄集落の人は後でお神酒を供えてお詫び





浅間山にて森林植生について講義する  
本多静六と学生（大正3年・1914）



宿舎にて囲碁を楽しむ本多静六（大正14年・1925）

をしたそうです。この浅間山は大学演習林発祥の地として、日本森林学会が選ぶ「林業遺産」に第一回目の選定で登録されています。

しかし当時、演習林全域が浅間山周辺のようなみごとに森林だったわけではなく、山火事跡地のスキだらけの原野も多くありました。大学の中には当時、「予算もないのに広大な山や原野を抱えてどうするのか」といった声もありました。このため、演習林設置の言わば「言いだしっぺ」である本多は多忙な中、千葉演習林の整備に自ら尽力します。千葉演習林での造林学現地実習を手配し、実習と呼ぶには非常にハードな造林（植林、手入れ）事業の陣頭指揮も執りました。ただ、最先端の林学を修めた俊英・本多とはいえ、自らスギやヒノキの植林事業を行うのは初めてでした。たとえば、苗木の入手もおぼつかない当初は、東京の駒場で実習かたがた育てた苗木を荷馬車と汽船で遠路はるばる運ぶ必要がありました。しかし、弱った苗木を植えたため枯れるものが多く「大学の先生が植えた苗はみごとに枯れるな」と言われるなど、さんざん苦労したそうです。本多の初の植林地という意味で「本多静六の物領息子（長男）」と渾名されたこの切通南沢きりどほみなみさわのスキ林は現在、苦勞の甲斐あって、通りがかる車の車窓に約百二十年生の巨樹の威容を見せています。

#### ■本多静六の「造林学現地実習」

明治三十一年（一八九八）には本多静六の同窓生で同僚である川瀬善太郎が初代の演習林長に就任し（ただし勤務地は東京）、辣腕を振るっていきます。



「本多静六の惣領息子」切通南沢のスギ高齢林

現地事務所や管理体制が徐々に確立し、以後の本多の千葉演習林での役割は主に、専門である造林学の現地実習の遂行となりました。

退官までに三十二回も行ったという本多の造林学現地実習は、変遷はありますが八日間などの泊まり込みで行われました。森林のあらゆる面に精通する本多の博覧強記ぶりがいかに発揮されるだけでなく、本多ならではの人生に対する示唆に富んだ名物講義でした。名物講義であったと私に分かるのには根拠があります。一つには林学教育の最先端の様子として注目されていたこの実習の様子が業界紙などに細かく報告されていたためですが、もう一つは、本多の指導の下で毎日、参加学生が持ち回りで本多や他の先生に張り付けてその一言一句を書き止め、朝の三時四時までかけて整理した「プロトコル」(日誌の意)という詳細記録が残されているためです。現在、大正五年(一九一六)〜大正十一年(一九二二)までのものが千葉演習林に残されており、また退官間近の大正十四・十五年(一九二五・一九二六)のものを元にしたという『清澄演習林本多教授指導造林実習日誌』が印刷されています。

これらによると、退官間近には大変幅のよかった本多の実習の様子は、急

傾斜地ばかりの演習林で地元的女性陣に「綱で引かれたり押されたりして」悠々と移動し、ポールを手にして毎度「諸君!!」と声をかけてから、森林の植生、植え付けや枝打ち等の様々な作業、木材や林産物、海岸林など森林のいわば環境保護的側面、またウィットに富んだ人生への警句など広範な内容を学生に飽きることなく語り続けるという、インパクト溢れるものです。基本的には膨大な林学の知識が講義され記録されているのですが、ここでは、実習の雰囲気がよく感じられる箇所をいくつか引用します。

「諸君！私は若い時、落第生を出さないのは先生の威厳に関するものと思つて落第をさせたことがあるが、今では自分の子や孫のことを思ひ、君等を落第させることは可愛想になつて来た、それで私は出席さへして居れば絶対に落第させぬだけに、教授に努力することに決心した」「諸君！この機会において植樹造林の失敗談をいたします、近頃は自慢話ばかりしているが若い時分にはお恥ずかしい失敗もたくさんありました」（『造林実習日誌』第四日）

「先生よちよちとしてポールをついて余等の実習地に來たり給ひ、道より数尺の上に上らんとしたふ余りの偉大なるお臀<sup>おしり</sup>を推して漸く登ることを得た先生 悠々として我等を臨み再び講義を始め給ふ。臨月に近き先生の大腹、肋骨は流行先端の服装をつき出して、威風すでに萬山<sup>ばんざん</sup>を圧す」（プロトコル 大正八年（一九一九）三月二十七日）

「終始一貫、博士の元気浚刺として壯者を凌がんとするに我等は唾然たらざるを得ざりき」（プロト

コル 大正九年（一九二〇）三月二十三日）

（所用のあつた本多が遅れて合流した場面）「前日、本多教授、綱引き臀押し<sup>おしりおし</sup>の二人がかりの奇態な様で堂々來着あり、一同欣喜雀躍、手の舞足の踏む所を知らず」（プロトコル 大正十年（一九二一）三月二十七日）

（現代風に一部の表現を改めています）

復習のため、プロトコルの内容は翌日に全員の前で朗読したとのことですので、本多を慕つて書いた軽口では大いに沸いたことでしょう。

この現地実習は、「造林学実験」と名前を変え、内容も徐々に変遷してはいますが、現在に至るまで千葉演習林で毎年の春先に連綿と続けられています。東京大学造林学研究室と千葉演習林にとって重要な仕事（行事）であり、また近年では、林学を学び始めた東大生が初めて本格的に森と接し、その手ごたえを心に深く刻み込む機会となっています。本多静六の遺産はこの千葉の地に有形無形の形でしっかりと受け継がれていると言えるでしょう。

#### 参考文献

- ・大日本山林会編（一九三二）「明治林業逸史統編」
- 以下については、インターネット上で自由に入手できます。
- ・東京帝国大学農学部演習林（一九一六）「清澄演習林本多教授指導造林実習日誌」
- ・根岸賢一郎（一九九二）「千葉演習林沿革史資料③」・東京大学農学部林学科学生<sup>（1）</sup>の造林学現地実習の変遷」演習林 第二十八号
- ・奥山洋一郎（一九九九）「戦前期における東京大学演習林をめぐる縮小論議」国有財産整理事業における東大の対応」東京大学農学部演習林報告 第百二号
- ・根岸賢一郎ら（二〇〇三）「駒場苗圃、代々木演習林、田無苗圃」演習林田無試験地沿革史補遺」演習林 第四十二号



造林学現地実習の詳細記録「プロトコル」と『造林実習日誌』

## 明治神宮 未完のプロジェクト——森と水の循環を求めて——

明治神宮国際神道文化研究所主任研究員 今泉 宜子

### はじめに

私共としてはそれならば、未熟なる今日の學術と建築などで、非常な立派なる神苑を作り上げて見ようと決心したのであります。元來、この木を植ゑると云ふ点から云ふと、無理なところに作るのだから、代々木の神苑の設計と云ふものは、私共にとつては実は一所懸命でありましたのです。

右は、本多静六が明治神宮造営の「隠れたる事実」として語った後日談の一部である。

現在、年間約一千万人の参拝者が訪れる明治神宮。明治天皇とその皇后である昭憲皇太后を祀る神社として創建されたのは、大正九年（一九二〇）のことだ。代々木に広がる鬱蒼とした神苑は、本多静六を中心とした当時の林学者たちが叡智を尽くして実現した人工の森である【図1】。しかし、その造営は本来木を植ゑるには無理なところに立派な神苑を作るといふ、大変な挑戦だったと本多は告白する。

実は大正当初、本多静六は林学者の立場から明治神宮を東京に造営することに強く反対していた。神社の敷地として重要な条件とは、「永久に亘つてその

神社の莊嚴神聖を維持することが出来るやうな天然の山水風景」である。しかし、東京ではその風景を作り維持するのが難しいというのが本多の主張だった。その彼の心を動かしたのは、渋沢栄一の「切々たる熱情」による説得という。後に明治神宮奉賛会を立ち上げる渋沢は、天皇崩御の直後から、是非東京に神宮を！と民間で請願運動を展開した中心人物だ。渋沢は説く。金は幾らでも作るから、君らの専門技術で何とか東京に、「人工で天然に負けない大風景」を作り出して欲しい——。

誕生からまもなく百年。かつて、本多静六達が非常な決心から、一所懸命になって手がけた代々木の森は、今や立派なる神苑となり、その森づくりの歴史には各方面の注目が集まっている。昨年の平成二十八年一月、『ナショナル ジオグラフィック』日本版の表紙を飾ったのも、「大都会に浮かぶ緑の島」だった。明治神宮を紹介した特集記事「祈りの森 百年の生命」は、その後、同雑誌のフランス版、台湾版に相次いで再録された。日本版オリジナルの特集が海外版でも紹介されたのは、平成七年の創刊以来この記事が初めてだという。先日はまた、フランス人のテレビ番組制作者から取材の依頼があった。明

治神宮の美しさとともに、この森づくりに賭けた本多静六の情熱にスポットをあてた番組を作りたいのだと。今、生誕から百五十年を経て、本多静六は彼が手がけた森とともに、国内外の関心を惹く存在になりつつある。

冒頭に紹介した本多の談話は、明治神宮鎮座二十年（昭和十五年）を記念した座談会で語られたものだ。明治神宮造営局の一員として大正の創建に関わった、建築家の伊東忠太や神社考証の宮地直一らも顔を揃え、「明治神宮御造営の由来」を語った貴重な歴史の証言だ。本稿では、この談話記録における本多静六の発言をたどりながら、百年前の隠れたる事実、その詳細を読み解きたい。本多にとつて代々木で挑んだ森作りとは、同時に「水」作りへの挑戦でもあった。

### ■百年計画の森づくり

総面積七十二ヘクタール、東京ドーム十五個分というこの巨大な森の存在感は、上空から撮影した写真を見れば一目瞭然だ【図2】。大都会に浮かぶこの緑の島は、全国から寄せられた約十萬本の樹木によつて造成された人工林だ。その造営には、のべ十



図1 大正9年11月1日、明治神宮鎮座祭に参列した明治神宮造営局の人々。前列左から3人目が本多静六（中澤慶人氏所蔵）

一万人に及ぶ全国青年団の勤労奉仕があった。

造営の公式記録『明治神宮造営誌』が記すように、この境内林は、東京の土地本来の気候風土に適した樹種として、常緑広葉樹を特に主林木に設定し、緻密な計画のもとに作られた森だ。その担い手の名は、本多静六を筆頭に、本郷高德、上原敬二。ほぼ一回りずつ年が離れた東京帝国大学農科大学の先輩・後輩にあたる。

大正四年（一九一五）五月、内務省に設置された明治神宮造営局に、本多が参与、本郷、上原はそれぞれ技師、技手として用いられ、林苑造営計画に携わることになる。

彼らの理想は、将来は人為によらず自然の循環（天然更新）によって永遠に繁茂する森を作ることだった。そのためには暖帯に属するこの土地に最適な樹種を選定する必要がある。また周辺の工場からの煙による大気汚染をいち早く問題視し、都市環境に強い森にすることも注意を払った。このような考えから、本多たちは神社林は杉であるという当時の常識を覆し、明治神宮の森にふさわしい樹種は常緑広葉樹だという結論に

いたる。

彼ら林学者が実践の詳細を記した『明治神宮御境内林苑計画』（以下、『林苑計画』）には、百年を越える時間軸で天然林相を実現することをめざした、四段階の遷移経過が見事に予測されている【図3】。

### ■水の風景を現出せしめん

ところで、本多静六が明治神宮東京鎮座に反論した際、神社の神聖さに不可欠の要件として、「天然の山水風景」を挙げたことは先に述べた。本多の発言を丁寧にも読むほど、明治神宮造営にあたり、彼が山（森）とともにいかに水の存在を重要視していたかに気づかされる。

境内に足を入れれば、参拝者はまず「清冽なる谷の流れ」を渡って精神を清め、いよいよ昼なお暗い森の内を進む。すると、人々は知らず知らず靈感に打たれ、「なにごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」境地にいたる。本多によれば、これこそが代々木で実現すべき「天然に負けぬ大風景」だった。

聖なる森には清い水の流れが欠かせない。その思いは、隠れたる事実の続きとして、座談会で本多が語った二つのエピソードに集約されている。その一つを彼は「自慢話」といい、いま一つを「少しく私のやりそこなった失敗談」と表現する。実はそのどちらの造営秘話にも、水の風景を生み出そうとする本多の苦しみが満ちていて印象深い。

まず自慢話から聞いてみよう。

境内の実地設計で第一に困ったことは、伊勢の五







十鈴川や日光の大谷川に比すべき、神橋を架ける流れをいかに作るかということだった。代々木の敷地には池とそれに続く低湿地はあったが、清冽な谷の流れが存在しない。ここに、「大きな清流は造られなけれども、せめて木曾路の溪谷にでもあるちよるちよるとした谷川」を現し、森厳な風景を作ることはいかならないか。

あらためて本多達の手による『林苑計画』を見ると、「水流設計」という言葉で慎重に風地上の熟慮を重ねていたことが分る。「水流設計ノ主旨トセル所ハ、成ルヘク自然ノ風景ヲシキ溪流ヲ現出セシメントスルニアリ」。

その苦心の成果が、南参道に架かる神橋とその下を流れるせせらぎだ【図4】。彼らの水流設計によれば、花菖蒲の名所と知られる御苑の池から流れ出た水は、湿地を改造した水路に導かれる。参道に架設した橋の下には、筑波産の自然石を配して水流の落差をつけ、小さな滝を現出した。この流れが暗渠を潜って境外に続き、やがて渋谷川に注ぐ。さらに陸軍省と交渉し、御苑に隣接する代々木練兵場（現代々木公園）の側に雨水調節池を設け、放水量の調節を図るという周到ぶりだ。

溪流の周囲には、一般の植栽計画と趣を変え、かえでを主とした落葉広葉樹を植え、新緑や紅葉など春秋の「装景」に意を用いた。ここで『林苑計画』が、年月を経た森の成長がやがて水を豊かにすることを期待して、水源涵養林の用に言及していることは特筆に価する。将来、流水状態が良好になることを願って、水流の集水区域に特に密植したというの

だ。「年ヲ遂ヒ、集水区域ニ於ケル森林準ク繁茂シ、林内ニ落葉厚ク堆積シ、蘚苔ノ類繁茂スルアラハ、之ニヨリテ水源ヲ涵養シ、流水状態ノ良好トナルヘキヲ予像スルニ難カラス」(傍点筆者)

人為による天然の水景が参拝者にどう受け止められるか、本多は完成後も心配だったという。ある日、信州あたりからの三人連れの老人が、神橋下の流れを眺めつつ、「明治神宮さんはよい場所に作ったものだ。この谷は減多に見られない景色だ」と語り合うのを聞き、思わず感激の涙をこぼしたと、座談の席で語っている。

### ■幻の水流計画

一方、失敗談とはなにごとか。正確には、志なからばで頓挫した未完の水流計画をめぐる秘話といったところか。

現在、境内には三つの池がある。御苑の南池、北参道の東側にある東池、そして宝物殿前の芝地に広がる北池だ。この三つ目の池は、実は人造である。この近辺は、葦や蒲、いぬやなぎが叢生する低湿地で、一旦雨が降れば水が溜まり、植栽には向かない土地だった。そこで当初の計画では、ここに苑池を築造し、水源はその上方に鑿井さくせいをして求めることにした。さらにその井戸より発する水流は、一方を北池に注ぎ、もう一方は社殿周囲に自然に廻りめぐらし、乾燥しがちな参道に湿気を持たせる。防火の意味も込めて境内に「始終清い水を流す」という着想を、本多は日光などにヒントを得たという。

しかし、鑿井の結果、水源に想定した西部上方の

竹林附近から十分な水量が得られないことが判明する。このため人造池は当初より規模を縮小し、雨水を貯めるやり方に切り替えた。本多が願った清い水の流れは実現せず、境内の水流計画は変更を余儀なくされる。

この幻の水流計画を描いた地図が現存する【図5】。大正四年五月、明治神宮造営局は宝物殿建築設計のいわゆるコンペを実施することとし公募を開始するが、その募集要項に添えられた参考図だ。敷地北部の余白が宝物殿敷地にあたる。この西方、境内のはずれに描かれた方形の囲みの上に、小さく「鑿井」の文字が見えるだろうか。これが想定されていた水源だ。この井戸に端を発し、参道伝いに社殿へと続く清い水の流れを追いかけていただきたい。この細く長い水の道は、社殿周囲をぐるりと巡り、やがて御苑の南池に注ぐ。この水は神橋下で流れを集めて、渋谷川に合流する計画だった。

ところで、このコンペ参考図は、当時の境内配置計画の進捗を示す資料として興味深い。大正九年（一九二〇）創建時の図【図6】と見比べれば、参道計画が異なっており、正参道が社殿の東側に接続されている。また、御苑の南池の水源である清正の井が「手水舎」に想定されていることが分かる。この井戸を手水に利用する案は、「清境を破壊するが如き」暴挙として、折下吉延をはじめとする造園系の技師達に退けられたと記録にある。

水流計画の変更を受けて、土木技術者の立場から参道沿いの水路工事を任されたのが牧彦七だった。震災後の帝都復興事業でも活躍することになる、道

路技術者の草分け的存在だ。その牧も、造営の由来を語る座談会同席者の一人であり、明治神宮の参道工事を、我国でその後勃興した改良道路の先駆であると自ら評している。

実は、本多が語る失敗談とはこの牧の発言を受けてのもので、牧が手がけた参道両側の側溝を「私共の風景の点から云ふと失敗」と談じている。しかし、急いで付け加えるなら、本多は牧の排水工事が失敗だといったのではない。人工で自然の山水風景を作るのだという企てが、水の分野では果たせなかったことを嘆いているのだ。実際のところ、参道両端に設けられた側溝には、一定間隔で段差を設けて小滝が作られ、水の流れを表現する等随所に工夫が施

されており、牧たちが幻の水流計画を引き継ごうと腐心した様子がうかがえる。

一方、人造池の周りには意識して葦やいぬやなぎ等の水生植物が植えられた。また、当初の鑿井予定地には「水源涵養の地」としての将来を期して、ひのき、しらかし、くす等を念入りに密植したという。遠山益氏によれば、「水源涵養」という術語が森林法に初めて登場したのが、明治三十年（一八九七）という。本多静六が多摩川上流域の水源林保護と造林の必要性を説き、自ら水源林経営の立案に着手するのが、その二年後のことだ。百年の規模で永遠の森を目指した本多静六とは、時が森を育て、森がまた水を育てることをよく知る人物だった。



図6 大正9年11月、明治神宮鎮座時の境内図（明治神宮所蔵）

## ■おわりに

鎮座二十年の座談会で自身がやりそこなった失敗談を語った本多は、「これからその失敗したところをとり直して欲しい」と後人の再挑戦に期待を寄せた。「風景の水源地も増しましたから、或はその方から最初の設計通りあれに清い水を流すやうに……」。談話記録に残る発言の趣旨ははっきりしないが、こういうことではないか。森が順調に生長して水源涵養機能が増し、地下水も豊かになりましたから、或いは牧さんが苦勞した参道水路を活用して、あれに清い水を流すことは出来ないか――。

平成三十二年（二〇二〇）、明治神宮は鎮座から百年を迎える。三年後のその年は、東京で迎える二度目のオリンピックイヤーでもある。これまで以上にたくさんの人々が、国内外からこの神苑を訪ねることになるだろう。そして、本多静六を知る。百五十年前に生をうけた、一人の林学者の叡智と情熱と挑戦が、今もこの森と水の循環のなかに生きていることを知るはずだ。

百年から次の百年へ。明治神宮という未完のプロジェクト、我々はその歴史の途上にある。

## 参考文献

- ・遠山 益『本多静六 日本の森林を育てた人』実業之日本社・平成十八年。
- ・内務省神社局編集発行『明治神宮造営誌』昭和五年。
- ・明治神宮「明治神宮御造営の由来を語る」『明治神宮叢書』第十七巻・国書刊行会・平成十八年。
- ・本郷高德『明治神宮御境内林苑計画』『明治神宮叢書』第十三巻・平成十六年。

## 科学者本多静六の業績

国立研究開発法人森林総合研究所森林植生研究領域長 正木 隆

### ■本多静六博士は林学の研究者である

明治時代の日本人は「坂の上の雲」を目指してひたむきに生きてと言われているが、本多静六博士はまさにその典型といえるべき偉大な人物である。本多博士は若くしてドイツに留学して最新の学問体系を、人よりも短期間で習得した。毎日ひたすらに精進したことが伝えられている。

その結果として、本多博士がその生涯に残された著作は三百冊を超えた。最近では、装いも新たに再出版された著作も多い。しかし、再販されている著作のほとんどは、蓄財術や人生訓に関するものではないだろうか。筆者はそのことに対して、常々不満をいだいている。

なぜなら、本多博士は林学を修めた学者なのである。ついでに筆者もまた林学を修めた研究者である。その筆者からみると、科学者としての本多博士の業績は、正当に評価されていないように思えてならない。

蓄財術や処世術の著作は、本多博士の業績としては「従」である。林学者としての業績こそ「主」であり、本多博士の真骨頂だった。筆者はそう考えている。

そこで本稿では、本多静六博士の林学の研究者としての業績の現代的な価値について、簡単に紹介してみようと思う。多少難しい用語を交えざるをえないが、読者のご寛容をお願いしたい。

### ■森林のもたらす「生態系サービス」

現在、生態系がもたらすさまざまな恩恵の分析・説明は、世界的にホットな研究テーマである。国連は、二〇〇〇～二〇〇五年に行なった調査にもとづいて、地球上では生態系の劣化が進み、生態系からの恩恵が減少している、と警告した。それが契機となって世界的に研究が行われるようになってきたのである。しかし本多博士は、今から百年以上前に、「アカマツが増えているのは森林が劣化しているからだ」と述べ、いわゆる「アカマツ亡国論」という形で（日本国内の話ではあるが）警告を発していた。時代がようやく本多博士に追いついたのかもしれない。

国連の整理では、生態系からの恩恵（これを「生態系サービス」とよんでいる）は四つに分類される。源となるのが「基盤サービス」で、これは、光合成を行なう森林や発達した土壌など、すべてのサービ

スの基盤を差す。それをベースに「供給サービス」（水、木材など目に見える物資の供給）、「調整サービス」（洪水制御、災害防止など目に見えにくい恩恵）、「文化的サービス」（レクリエーションや安らぎなど精神的なもの）の三つのサービスが発揮される、と整理されている。

上記の分類を念頭に、本多博士の言説を振り返ってみよう。なお、【】で囲んだフレーズは主に、本多博士の著書である「森林と樹木と動物」からの引用である（旧仮名遣いは改めている）。

博士曰く、【一国の山全部が青々としている間はその国が盛んになる】。これはまさしく森林生態系の有する基盤サービスを言い当てたものである。そして、【森林は水源の養いとなる】と述べているのは供給サービスへの言及である。奥多摩に水源林を造成したのはこの科学的な考えに基づくものであった。さらに、【山に森林が茂ってさえいれれば決して洪水の心配はない】、【一年中の温度の変化を調節する】、

【森林は雪なだれの害を防ぐ】なども述べており、これはまさに調整サービスに他ならない。六甲山系ふたがき再度山での植林はこの考えに基づく事業であったし、鉄道防雪林の造成を体系化したのも同様だろう。も

ちろん文化サービスについても、【森林を世人の休養・保健のために利用する】ことを推奨し、その意義・価値を明確に指摘している。

筆者が興味深く思うのは、【松や樅<sup>もみ</sup>などの常緑樹の

間にそまった紅葉は、色の配合で、紅色がきわだつて照り映え、一段と美しくみえる】など、多様な樹木が存在することによる文化的サービスの向上を認めていたことである。本多博士は、今で言う「生物

多様性」のもつ意義を、すでに認識していたのかも  
しれない。



二〇〇九年（平成二十一）に筆者が台湾大学の演習林を訪れた時、その一角で大切に育てられている大木の前を通りかかった。写真の右下隅に説明板（本文21頁）のあるのが見える

## ■ 植生遷移の概念

次に明治神宮の森についてふれてみたい。明治神宮の森の造営を任された本多博士は本郷高德や上原敬二らとともに案を練り、アカマツを上層に、ヒノキ等針葉樹を中層に、常緑広葉樹を下層に植栽する斬新な手法をとった。計画では上層のアカマツが徐々に常緑広葉樹に置き換えられ、百五十年後には常緑広葉樹を主体とする林相が永遠に維持される状態に達することになっている。現状をみる限り、ほぼこの計画通りに森林が変化しつつあるように見受けられる。

この考え方は、まさに「植生遷移」そのものである。植生遷移とは、荒地にはまずその環境に耐える植物が侵入して土壌の生成が始まり、穏やかな環境が形成されることで他の植物の侵入が容易になることで、その姿が徐々に変わっていく仕組みを差している。一九一六年にクレメンツという学者が提唱した有名な概念である。アカマツはまさに荒地に耐える植物といえる。

さて、本多博士が明治神宮造営局に参加して林苑造成の責任者となったのは大正四年（一九一五）。クレメンツが植生遷移の概念を提唱する一年前のことである。はたして本多博士らは、クレメンツの理論をヒントにしたのだろうか、それとも独自に考えたのだろうか？ 正直なところ筆者にはわからない。いずれにせよ、遷移理論を実際の森づくりに応用したのは、間違いなく本多博士らのチームが世界初である。しかも、現在もなお、このような森づくりは少なくとも日本国内では行われていない。

う考えると、明治神宮の森づくりは、古今東西唯一無二の事業であった、と断じてよいだろう。

## ■ 森林の長期的な研究基盤の確立

本多博士は東京大学の演習林をいくつも設定したが、台湾（当時は日本の領土だった）や北海道の富良野の演習林のコンセプトが非常に素晴らしい。いずれも大きな標高差を有するのである。台湾の演習林は、標高二百二十メートルから三千九百五十二メートル（台湾の最高峰玉山）まで、実に約三千七百メートルの標高差に及ぶ。富良野の演習林は、標高百九十九メートルから千四百五十九メートル（大麓山）まで約千三百メートルの標高差に及ぶ。これは、森林の姿が標高とともに変化することを「森林帯論」の中で体系化した本多博士ならではのユニークな設定である。ちなみに、台湾の演習林は、そのまゝ国立台湾大学演習林に引き継がれ、今もなお、演習林内では本多博士が植栽した樹木が大切に育てられている（本文19頁写真参照）。

さて、現在、気候の温暖化が進んでいると考えられているが、森林の分布がそれにもなつてうまく変化しているかどうか、が大きな研究テーマとなっている。それに対して、台湾や富良野のように大きな標高差を持つ演習林は、その解明のためにうつつの調査地となる。本多博士の設定した演習林は、長期的な時間をかけて変化していく森林を長期的にさまざまな角度から研究する場として、実に理想的な設計なのである。一九九三年には、Long-Term Ecological Research（長期生態研究）を

目的とした世界的な生態系調査地ネットワークが設立されたが、もしかすると本多博士は、当時すでにそういった発想を抱いていたのかもしれない。

## ■ もしも今、本多博士が現役の研究者だとしたら？

以上のように、林学者としての本多博士の業績は先見の明に満ち溢れている。ここで述べたもの以外にも、スペースの都合で割愛したものは多い（例えば国立公園の設定など）。この業績の数々を目の当たりにすると、思わず「恐れ入りました」と頭を下げてたくなってしまう。

その一方で、現在の科学的な知識からみて、修正を要する点も実はある。しかし、それはしかたのないことだろう。むしろ、そうでなければ、本多博士以降の研究者が何もせずにサボっていたことになるのだから。

それでは、本多博士の科学的な業績のうち、どのようなところに要修正点があるのだろうか？ 本稿ではそれについて、もしも今、本多博士が生きていたらきつこう考えたことだろう、という一種のシミュレーションとして、主に明治神宮の森を題材に考えてみたい。

まず、明治神宮の設計は大きく異なるものになった可能性がある。明治神宮の森は種の多様性も考慮された先進的な設計だが、実は遺伝子の多様性への配慮が欠けている。明治神宮の森は、異なる地域から集めた苗木をいっしょくたにして植えているため、自然の生態系としては不自然な遺伝的な構造となっている。いや、むしろ遺伝的な構造が存在しない、



説明板を見ると、1924年（大正13）に本多静六博士が植栽したランダイスギであると記されていた。

という方が正確だろう。もちろん、今後少しずつ樹木同士が交配して構造が形成されていくと思うが、少なくとも百五十年では無理である。遺伝子の多様性を含む生物多様性の概念は一九八〇年代に確立したが、もしも本多博士がそれを知っていたら、必ず神宮の森の造成に反映させたであろう。例えば、苗木の産地も考慮し、同じ産地の苗木が互いになるべ

く近くなるように配置したかもしれない。

それから、本多博士は都市公園も森林生態系とみなしていた感があるが、個人的にはこれに対して異議がある。都市公園は、たとえ樹木が生えていたとしても森林生態系ではない。森林は樹木だけではなく森林に依存する動物や菌類が共存し、また、自然枯死などの突発的な変化を自己修復する仕組みを備えた、いわば「それ全体が一つの生物」であるかのように振る舞うシステムである。この観点からみると、明治神宮の森は、間違いなく森林生態系である。しかし、都市公園にはこのような自律的な仕組みがないので、森林生態系とは言えない。現代的な考え方では、都市公園は景観（注：この場合の「景観」とは風景という意味ではなく、質の異なる複数の生態系が組み合わせられている広いエリアをさす概念である）の一要素として生態系に位置づけることになるだろう。もしも本多博士が今生きていれば、そういった景観生態学の枠組みで明治神宮や都市公園を位置づけ、より大局的・広域的な視野で自然を捉えるのではなからうか。

また、明治神宮の森の計画で最終的な林相を「永遠不変」とした点は、今日的には疑問視されるどころが大きい。長い時間の果てに安定的な姿に到達するというクレメンツ流の考え方には、キリスト教の影響があるように思う。つまり、神が作り給うた『自然』は、安定した絶対的な姿に向かって変化していく、という信仰が背後にあるような気がしてならない。

しかし、二十世紀後半以降、自然界は安定状態に

達することなく常に変容を続けている、という非平衡理論の考え方が提唱され、現在それがむしろ主流となっている。また、仮に安定状態の存在を認めるとしてもそれは一つではなく、複数の安定状態の間を何かの拍子に行ったり来たりするのではないか、というレジームシフト（代替安定状態理論）の考え方も支持を得つつある。

こういった最近の理論に立つと、明治神宮の森が永遠に不変の姿に達することは永遠にありえない、ということになる。計画では植栽から百五十年後（今から約五十年後）に永遠不変の相に達する予定だが、現時点の林相から判断するとクスノキを主体とした森林になるものと予想される。しかし、さらにその後、シイの林に変化するかもしれない。あるいは次世代の木がうまく育たずに一時的にやや疎林の状態となってしまうこともあるかもしれない。つまりは、諸行無常である。

このように考えると、現在の科学には、意外にも東洋的な考え方が浸透しつつあるとも言える。もしそうだとすると、本多博士が今生きていて現役の研究者であれば、水を得た魚のごとく、明治の頃以上に大活躍をしているのではないだろうか？ もちろんこれは筆者の勝手な想像である。しかし、こういう想像をさせてしまうほど、科学者としての本多博士は巨大なのである。本多博士の行なった科学業績は、現代に生きる人々にとって、まさに宝物としての価値があるだろう。そのことをもっと多くの人々に知ってもらいたい。筆者は心からそう願うものである。

# 日本の自然、日本の風景 — 中部山岳国立公園を仰ぐ

本多博士の視点 —

奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員・  
国際日本文化研究センター共同研究員 岡本 貴久子

## はじめに

『生誕百五十年記念誌 本多静六一森と公園を愛した人』の刊行に際し、編集室から「国立公園」のお題を賜りました。造園・公園の専門家ではない筆者にとっては些か大きなテーマですが、僭越ながら、今回は国立公園協会副会長を務めた本多の言説に依拠しながら、上高地を中心に日本の風景美にまつわる本多の思想と功績について考えてみたいと思います。

## 一 国立公園とは

平成二十八年八月十一日、山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する国民の祝日として、新たに「山の日」が指定されました。当日は中部山岳国立公園内の上高地にて、皇太子御一家ご臨席のもとで開催された記念式典の様子をご覧になられた方も少なくないでしょう。

山岳美を誇る景勝地は各地に見られますが、今に継承される上高地の風光をめぐっては、近代化と自然風景の保存という課題から、本多やその高弟たちによる保護活動の取り組みが大きく影響したという背景があります。そこでまず日本の国立公園について概観しておきます。

国立公園とは、わが国の風景を代表するに足りる傑出した自然の風景地（海域の景観地を含む）で、環境大臣が関係都道府県及び中央環境審議会の意見を聴き、区域を定めて指定するもので（自然公園法第二条第二項、第五条第一項）、現在三十三カ所、国土の約五・六八パーセント（約二百四十七千三百十五ヘクタール）を占める自然の施設をあらわします<sup>1</sup>。

その目的は「優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図ることにより、国民の保健、休養及び教化に資するとともに、生物の多様性の確保に寄与すること」（同法第一条）にあり、天然資源や動植物をはじめとする生態系の維持・回復はいうまでもなく、ある一定の制限を設けて施設の適正な利用が図られることも含まれます。つまり自然を守るのみならず、自然と接することによって人びとがその知識を深め、レクリエーションや健康維持に役立てることも目的のうちに入ります<sup>2</sup>。

国立公園設置の由来は明治に遡り、米国のグラント政権下で制定されたイエローストーン国立公園（一八七二年）を端緒に、わが国においても具現化に向けて明治後半から大正、昭和初期にかけて様々

な議論がなされました。明治四十四年（一九一一年）第二十七回帝国議会では富士山に目を向けた「国設大公園設置に関する建議」（衆議院）や「明治記念日本大公園創設の件」（同）、日光に的を絞った「国庫の補助を仰ぎ日光山を公園と為すの件」（貴族院）が提出され、翌四十五年（一九一二年）、第二十八回帝国議会衆議院本会議において西山眞平提案の「日光山を帝国公園と為すの請願」が認められます<sup>3</sup>。

## 二 天然風景の保護・利用とその背景

いずれも山間部に位置することが特徴的ですが、では何故、国立公園設置の必要性が問われたのでしょうか。明治四十四年（一九一一年）七月、本多は「天然記念物を保護せよ」という論考で、その背景を次のように論じます。

「前世紀に於ては、世人の頭には一方には所謂進化学論によりまして、我々の生活状態は絶えず進展して已まざるものであるといふことを発明されたと同時に、一方には蒸気力であるとか電気力であるとかいふものが発明せられ、それによって人間が自然力を支配し、之を使用することを盛んにやるやうになりました為に、其結果として自然を愛し、天然を尊



図1 「日本アルプスを大公園の計画」  
 (上) 十二日間の踏査 本多博士語る  
 読売新聞、大正7年7月24日付

図2 「上高地の名風景を壊さんとする出願」  
 (中) 東京朝日新聞 昭和5年2月26日付

図3 山の趣味座談会 昭和6年6月13日  
 (下) 東京清水谷公園内皆香園 (『山林』585号より)  
 中央・本多静六、左端・小島烏水



今日の上高地 (大正池) 内田啓一氏撮影・提供

そこで本多は保護すべき対象に「其地方固有の山水、風景、動植物等」を挙げ、具体的に「稀有なる動植物、鉱物、老木、珍草、美林、風景に関する山川、湖沼、谷、洞穴或は岩石であるとか、景色の好い島とか岬とか、其外其郷土の歴史を連想すべき天然物の如きもの」を例示します。就中、「森林ほど正直に其地方の天然を表はすものはない」<sup>5</sup>として、ドイツに倣い天然記念物の保護はまず大木一本の

敬する念を失って、天然物は総て之を打ち壊はして利用せむとするに至りまして、天然の風景とか、其他あらゆる天然物、即ち此大木、或は大石なども打ち壊はされて金銭等の為に、伐られたり、削られたりしてしまつたのです」  
 つまり「文明の事業」という土地の開墾や道路鉄道の敷設が太古以来の森林や天然風景を失わせ、工場から発生する有害物質によって現地の生物や風致が害されたことに由来するといふのでした<sup>4</sup>。



保護に始まると説きますが、これは保護すべき樹木一本の拡大したものが森林であるという認識に基づいています。加えて自然環境を守るには対象物の直接的な保護に限らず、学校教育や法律の制定等を通じた間接的な保護、また山林会や山岳会、地質学会といった関連機関の役割も重視しています。

こうした見解から本多は天然風景を保護するための国民的な「公園林」、つまり「森林的公園ないし公園的森林」の設置を推奨するに至ります。そこでは特に古来の社寺林と遊園的な風致林を区別して考えることの必要性が講じられました。換言すれば、信仰の対象として本来荘厳であるべき森林保護のあり方と、国民保養やレクリエーションのための保護のあり方は異なるということです。前者については、本稿では深く論じませんが、例えば戦後間もない昭和二十一年（一九四六）に指定された伊勢志摩国立公園の大部分には神宮宮域林が含まれますが、この森は抑々大正十二年（一九二三）に、神宮の尊厳保持と五十鈴川の水源涵養を目的に、本多や川瀬善太郎ら神宮神地保護調査委員会が遷宮御用材育成のため、二百年の森づくりを念頭において計画した、持続可能な森林管理を指針に保たれてきたものです。後者では、例えば本多は豪州シドニーの「ナショナルパルク」についてこう説明します。

「是は千八百八十六年に出来たので、三十五エーカー（一万五千町歩）許の非常に大きなものであります。それが固有の森林で、其内に河があったり、海岸に出る所があったり、船で遊ぶ所があったりして、其森林中に三哩許り汽車が通って居って、何所

からでも降りて遊んで又汽車に乗って帰ることが出来る」。特に土日には工場で働く人びとが家族連れでやってきて、草原や木の下でピクニックをしたり寝転んだりして楽しんで帰って行くといえます。欧米の趨勢にすっかり感心した本多は、健康志向の立場からわが国にも森林的公園が必要であると実感し、雑誌『太陽』等に執筆して「大にやる積りであった所が、ポーツマスの条約で償金が一文も取れなくなつたから、私の『ナショナルパーク』もオザンになった」と述べています。本多の言うオザンの如何は詳らかではありませんが、このように都市工業化に従い、失われつつある天然風景の保護とその利用が各方面で論じられるようになり、それが国立公園の実現へとつながってゆくのです。

### 三 上高地の風景と近代化 中部山岳国立公園の誕生

山岳風景を保護する一方でその利用を促すには、本多が指摘した近代文明の産業とうまく調和を図ることが求められます。深山幽谷の美しい風景を文人墨客の風流の対象から、これを一般市民に開放したのは、本多が推進した山岳鉄道やケーブルカーの恩恵にあるといえましようが、風景美を楽しむ機会を広く国民に付与するために、本多はあくまで原生自然の保護を前提としたうえで、自然との近代的な付き合い方を探究しました。

その姿勢が顕著に現れたのが「信州上高地国有保護林内発電用貯水池設置反対の建議」です。大正十三年（一九二四）十二月十四日付で、庭園協会代表として本多静六理事長の名を以て加藤高明首相、若

槻禮次郎内相、高橋是清農相、犬養毅通相、本間利雄長野県知事に提出されました。

「抑も上高地の地たるや所謂日本アルプスの核心に当り、一万尺を上下する峰巒を以て圍繞せらるる其国立公園としての価値は世界第一との評ある彼の北米合衆国ヨセミテ溪谷と伯仲の間にあり。：然るに該貯水池計画実現の暁には現在禁漁区たる明神池、穂高神社境内池と共に此優秀なる平坦地の大凡三分の二を深く水底に没せしめ、再び此世界的に稀有の天然風光に接する能はざらむべく、且つ今日同地に於て得らる、釣魚散策野営等の娯楽を失ひ、：貯水池は一大水景を加へて一帯の風景を美化するものなりと然れども、此天然の神秘境に於て人工的貯水池の無価値有害なるは詳論を俟たず」

建議の内容は「国家的風景地」かつ「国民的享樂地」として国立公園候補地の第一級に位する上高地に致命的な障害を与えるとの理由から、計画中止または変更を求めるものでした。

上高地については、大正七年に日本アルプスを避暑地にする大公園計画が練られた際、本多は十二日間かけて周辺を踏査し、その様子を「半ば身は仙境に惹き寄せられる気持がする」と絶賛しました(図1)<sup>10</sup>。国立公園法が成立する前年の昭和五年（一九三〇）には、大正池の名風景と讃えられた湖中の枯木一千本伐採計画に異議を唱え、『日本アルプスの著者小島鳥水もまた「上高地の生命を奪う」と反対した経緯もあります(図2)<sup>11</sup>。

本多と小島は昭和六年（一九三一）六月十三日に開催された「山の趣味座談会」で、同席した柳田國

男や田村剛等とともに山岳風景と近代産業のあり方について語り合いますが、本多の姿勢は必ずしも近代的な発展を否定するのではなく、風景の破壊は各場所によるもので、近代文明が適地で適した方法で用いられることに善悪はないという意見でした(図3)<sup>12</sup>。

「原始的な美しい自然の姿を備へた大風景地を選んで、之を国家の力で保存し、更に進んで之を開発して、国民の保健、休養、教化に資する目的で生れ出でたもの」こそ、「即ち我が国立公園」と本多が力説した所以です。もともと国立公園は「一朝一夕にして然も政府の力のみを以て成し遂げられるものではなく、一般国民の同情ある協力を俟たねばならないもの」であることは、本多が尽力した都市景観を美しく保つための緑化運動においても明らかです<sup>13</sup>。

こうしてわが国最初期の国立公園として昭和九年(一九三三)に雲仙、霧島、瀬戸内海、阿寒、大雪山、日光、中部山岳、阿蘇、昭和十一年(一九三六)に十和田、富士、吉野熊野が指定されました。「中部山岳」は従来の「日本アルプス」を指しますが、これは昭和九年(一九三三)八月九日の国立公園委員会総会で、国民精神鍛錬の場としての国立公園の役割が論じられ、内務省側から中部山岳の名称が提案されたところに由来します<sup>14</sup>。しかし「アルプス」の文字は消えることなく今日に呼び習わされています。実際、戦後に指定された国立公園の中には山梨、静岡、長野にまたがる「南アルプス国立公園」(昭和二十九年)があります。

本多は国立公園の使命の一つに「外客を誘って以

て日本に対する認識を新たならしめ、延て国際間の親善と世界人類の幸福に貢献」することを挙げます<sup>15</sup>、アルプスの通称も各国から訪れる人びとに親しみやすさをもたらしていることでしょう。

### むすびにかえて 「山高故不貴 以有樹為貴」

国立公園が実現した昭和十年十月十五日、「国立公園の夕」講演会で、本多は「我国風景の特徴」との題目で、世界の千山万岳を跋渉して調査した結果規模こそ欧米に及ばずとも、日本の山水風景が第一であると断言します<sup>16</sup>。こう見極める基準にあるのが「森林は山岳風景の本体をなすものであり、森林なくしては山岳風景の価値は消滅すると称してよい」<sup>17</sup>という本多の思想です。先のとおり「森林ほど正直に其地方の天然を表はすものはない」と説く本多の視点は、常に樹木一本を仰ぎ見るところにありました。

そして、この思想を育んだ源流には、本多が同講演のなかで引用した「山高きが故に尊からず、木あるを以て尊し」(『実語教』)<sup>18</sup>という倫理的教訓があると考えられるでしょう。

未来に継承すべき、わが国の風土を特徴づける美しい山岳風景は、このように近代化の中にも古く伝えられる伝統的な教えが先人たちによって大切にされ、活かされてきたところに保たれてきたといえるのではないのでしょうか。

#### 参考引用文献

- 1 国土面積は三千七百七十九万七千二百一ヘクタール(平成二十六年、国土地理院)。環境省「自然公園面積総括表」(平成二十八年九月十五日現在)。
- 2 環境省自然環境局国立公園課「未来に引き継ぐ大自然 日本の国立公園」(平成二十八年)。
- 3 丸山宏「国立公園設置運動に於ける社会・経済的背景」『京大農学部演習林報告』五五巻、昭和五十八年十一月、二七二〜二七四頁。水内佑輔・古谷勝則「帝国議会と行政の関係をふまえた国立公園行政の開始に関する研究」『ランドスケープ研究』日本造園学会、Vol. 9、平成二十八年、六五〜六六頁。
- 4 本多静六「天然記念物を保護せよ」『斯民』第六編四号、明治四十四年七月(復刻版「斯民」不二出版、平成十三年)、一〇六〜一〇八頁。本多静六「天然の宝庫を利用せよ」『斯民』第六編五号、明治四十四年八月、一三九〜一四三頁。
- 5 本多静六「市街と公園」『龍門雜誌』二三四号、明治四十年十一月、一四〜一八頁。本多静六「公園林と京都市」『大日本山林会報』三三八号、明治四十三年三月、一〇六〜一〇四頁。
- 6 木村政生「神宮宮域林の環境林としての施業」『明治聖徳記念学会紀要』明治聖徳記念学会、復刊第三十四号、平成十三年十二月、一〜二二頁。
- 7 本多「天然の宝庫を利用せよ」、前掲。
- 8 「信州上高地国有保護林内発電用貯水池設置反対の建議」『大日本山林会報』、五〇六号、大正十四年一月、九六〜九七頁。
- 9 読売新聞、大正七年七月二十四日付。
- 10 読売新聞、昭和五年二月二十六日付。
- 11 東京朝日新聞、昭和六年八月、四三〜四五頁。
- 12 「山の趣味座談会」『山林』五八五号、昭和六年八月、四三〜四五頁。引用は本多静六「我が国風景の特色と国立公園の使命」『国立公園』第六巻十一号、昭和九年十一月、三〜五頁。参考として岡本貴久子「本多静六にみる都市美の理念と方法論」『植樹デーと植樹の功德』一考、「都市公園」二二四号、平成二十八年。
- 13 東京朝日新聞、昭和九年八月十日付。
- 14 本多静六「我が国風景の特徴」『国立公園』第七巻十一号、昭和十年十一月、二〜四頁。
- 15 同前。
- 16 国立公園協会副会長本多静六「国民保健に森林の利用」『官報』七七〇号付録、昭和四年七月二十四日、三〜四頁。
- 17 本多「我が国風景の特徴」前掲。「実語教」は平安時代末から鎌倉時代に成立した往来物の一つで寺子屋等で使用された児童教訓の書。

## 本多静六を支えた人々 ― 妻銚子と養父晋、白石昌字と

### 愛弟子本郷高徳 ―

久喜市立郷土資料館 担当主査兼学芸員 栗原史郎

#### 一 本多銚子（一八六四～一九二一）

■ 幼少の頃より才媛の誉れ高く、英語に堪能

本多静六の妻である銚子（せん）とも言う。は、元治元年（一八六四）一月十一日に父敏三郎（後の晋）と母梅子（「むめ」とも言う。）の長女として生まれた。一人娘の銚子は父晋の自慢の種で、明治五年に日本で初めて開設した官立の東京女学校（通称「竹橋女学校」とも言う。）に入学し、書も当時有名な書家佐瀬得所（一八二二～一八七八）の教えを受けるなど才媛であった。明治六年十一月二十九日に明治天皇の皇后（後の昭憲皇太后）が東京女学校に行啓され、学習の様子をご覧になられた際は、銚子を含む成績優秀な十五名の生徒が賞与として英語の辞書を賜わっている。

銚子は伯母の出口せい（晋の姉。「たか」とも言う。日本キリスト教婦人伝道者の一人）に可愛がられ、その影響でキリスト教を信仰するようになった。銚子は母梅子とともに明治九年頃キリスト教徒になり、その信仰は生涯変わることがなかった。

明治五年、大蔵少輔吉田清成の米国派遣に伴い父の晋が随行を命じられた際には、銚子は伯母が身を寄せる米国長老協会宣教師カロザース夫人の開設

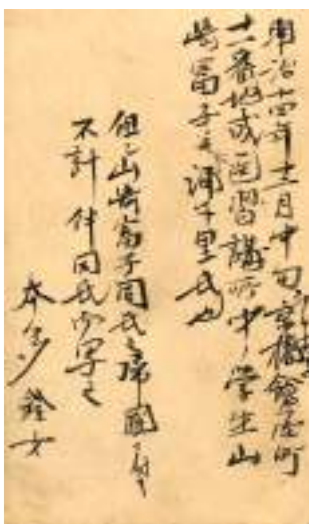
した築地居留地のA六番女学校に預けられ、英語を学んでいる。また、明治十年（一八七七）から十一年頃には伯母を介してアメリカ人宣教師メアリ・ツルー夫人のもとで英語を学んだと思われ、十歳頃には外交官河瀬真孝子爵夫人のために通訳をつとめたという。河瀬夫人は伊豆葎山代官江川太郎左衛門の娘で、銚子の母方の祖父雨宮中平が江川太郎左衛門の江戸詰家老であったことから本多家とも親交があったようである。

■ 日本で四人目の公認女医  
銚子は、明治十四年（一八八一）十七歳のときに、後の海軍軍医総監高木兼寛の発意で開設した成医会講習所（東京慈恵会医科大学の前身）に入学した。高木が日本の女子に近代医学を修得する能力があるかどうかを試すため、東京女学校出身の銚子と松浦里子を抜擢したからであった。当時女性が医者になることは困難であったが、銚子は熱心に勉強し、明治二十一年（一八八八）二十四歳のときに試験に合



本多時代の講習所成医会  
銚子（明治14年12月）、写真中央が銚子、左が松浦里子、右が山崎富子。

写真裏面には、「明治14年12月中旬（即ち17日なり）、京橋鎗屋町11番地、成医講習所中の学生山崎富子ならびに松浦千里氏なり。ただし山崎富子、同氏の帰国につき計らず。これに本多銚女」とある。これによれば当初は山崎富子（1850～1900）も、銚子や松浦里子とともに成医講習所の学生として選ばれたと考えられる。





本多家記念写真（明治32年頃、東京駒馬の官舎にて）、後列左端が銚子、右端が静六。前列右端は染谷亮作。10

格し、日本で四番目の公認女医となった。

明治二十二年（一八八九）東京農科大学の学生であった折原静六を婿養子に迎えて結婚。翌二十三年（一八九〇）静六がドイツに私費留学すると、東京芝区新堀町（現在の港区芝二・三丁目）の自宅に診療所を開業した。当時の新聞記事によると、銚子の評判はすこぶる良く、患者は門前列をなしたという。銚子は、往診の際は遠近にかかわらず交通費を受け取らず、貧困者には広く治療を施した。また、薬の代金を上・中・下の三等に分け、患者の財産状況に応じて納めさせたという。さらに自宅での診療の傍ら慈恵病院の産婦人科に勤め、同看護婦養成所の講師となり、また横浜フェリス女学校の衛生学を担任する等多忙を極めた。この頃、明治天皇第六皇女常宮昌子内親王殿下の侍医も務めている。

明治二十六年（一八九三）に静六が帰国した後、夫に従い東京駒馬の農科大学内の官舎に移ったが、医業を捨てることができず、赤坂新坂町（現在の港区赤坂八丁目）に新たに診療所を設け、毎日人力車で往復している。しかし、子供も生まれ、また夫静六を支えるため、明治三十年頃診療所を閉じている。銚子は静六との間に三男四女を生んでいる（うち二男一女は早世）。

#### ■夫静六を支え、家庭内を平和に保つ

##### ジャン憲法を考案

熱心なキリスト教徒であった銚子は、同情心

にあつく、困っている人には着物などを惜しげもなく与えた。本多家に集まる人たちは皆、銚子を信頼し、その言葉ならどんなことでも聞く風であったという。銚子は、夫静六に後顧の憂いなく研究活動に専念して欲しいと願い、子育てはもちろんのこと、家庭内の一切の庶事を引き受けた。しかも、毎夜子供を寝かしつけた後は、静六の助手として原稿の浄書や講義案の整理をし、さらには英文翻訳や手紙の代筆まで行った。

また、家庭内を平和に保つため、ジャン憲法を考案した。これは夫婦間もしくは家族たちのあいだで、何か意見の一致をみないことがあると、お互いに二度までは意見を主張し合うが、それでも決まらない場合、三度目はいつでもジャンケンで決めるといふものである。おかげで家庭内はいつも笑顔が絶えなかったという。

#### ■早すぎる死

銚子は静六をよく支え、妻たるものは夫のためにつとめ尽くして倒れるもまた本懐だとの確信をもっていたようである。静六が林学博士として大成し、しかも四分の一天引き貯金を実行して財産を築くことが出来たのも、銚子なくしては不可能であったことであろう。銚子は不幸にも四十三歳頃から慢性腎臓病を患い全快不能となったが、その後十四年間は生を全うし、大正十年（一九二二）十二月二十五日に脳溢血を発して五十七歳で亡くなった。銚子を失った静六の悲しみは深く、彼女の存在なしには、今日の私はありえなかったかも知れないと後に語っている。



竹内茂代（旧姓井出茂代）の結婚式にて（大正5年）  
前列右から2番目が銚子、左から2番目が静六

寄せている<sup>12</sup>。静六はこの中で、銚子の生き方は「旧き女」の典型であったが、むしろ幸福だったのではないかと記している。

## 二 本多 晋（一八四五〜一九二二）

### ■一橋家譜代の臣本多家を継ぐ

本多静六の養父である晋（改名前は敏三郎）は、弘化二年（一八四五）二月二十一日多賀家に生まれ、その後一橋家家臣の本多家を継いだ<sup>13</sup>。元治元年七月の禁門の変（長州藩の尊王攘夷派が朝廷を冒そうとした事件）では、一橋慶喜に従って朝廷警護の任にあたり、その功績により朝廷から褒賞を賜っている。慶応二年（一八六六）慶喜が十五代将軍になると、そのまま幕府に仕え、陸軍付調役並（陸軍奉行配下の役職）となった。

### ■彰義隊を組織

慶応四年（一八六八）正月、鳥羽・伏見の戦いで徳川幕府が朝敵となると、同年二月、慶喜の名誉回復のため、同志とともに彰義隊を組織している。晋は彰義隊の幹部（当初は幹事、のち頭取となる）として対外折衝を担当したが、同年二月二十七日、落馬事故で足を骨折してしまい、隊から離れることを余儀無くされる。

彰義隊は、江戸城開城後も上野の寛永寺に立て籠もって徹底抗戦する構えであったが、同年五月十五日、大村益次郎が指揮する官軍の総攻撃を受け鎮圧される運命にあった。晋はこの時、前日に知った官軍総攻撃の情報を何とか上野山の同志に知らせようと奮闘するが、官軍に阻まれて果たせず、参戦すら

出来なかった。晋は同志を殺してしまった苦悩と後ろめたさを生涯胸に秘めて生き続けた。

### ■明治以降のあゆみ

上野での敗戦後、名を敏三郎から晋と改め、しばらく静岡で隠遁生活を送った。その後、洪沢栄一の推薦を受け、明治三年（一八七〇）七月に民部省に出仕、次いで大蔵省に入った。同五年（一八七二）二月、大蔵少輔吉田清成に随行してアメリカ合衆国からヨーロッパに渡航し、翌六年に帰国している。明治十三年（一八八〇）退官して横浜正金銀行の役員となり、同二十一年（一八八八）まで勤め、退職後は彰義隊の往時を思い、上野東照宮に奉仕する生活を送った。

### ■本多晋と静六

明治二十二年（一八八九）一人娘銚子のために、当時東京農科大学の主席であった折原静六を婿養子に迎えようと縁談を進めた。静六が出した「卒業後、ドイツに四年間留学させる」という条件も、財産のゆるす限り何年でも洋行を引き受けようと快諾している。しかし、静六のドイツ留学中の洋行費として



家族写真（明治23年頃）、左から本多晋、初孫てる子、娘銚子、妻梅子

銚子の没後、静六は亡き妻の遺志に従い東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）へ奨学金として額面千円の帝国公債を寄附した。そして利子の半額以下を運用して本多銚子奨学金を創設し、後進女医の育成に充てるよう求めている<sup>11</sup>。医師としての道は半ばで断念した銚子であったが、常に後進の育成を気にかけていたことが窺える。

静六は大正十一年（一九二二）に銚子を偲んで、「大西洋上亡き妻の百ヶ日にあひて―旧き女を偲びて新しき女に告ぐ―」という回想を、匿名で雑誌に

用意した金四千円を、預けておいた銀行家の破産で失い、送金できなくなるといふ憂き目も見ている。

静六のミュンヘン大学におけるドクトルの学位授与式の時、大学長より五百人の来賓に自分の名前も披露があったと聞いて次の歌を詠んでいる<sup>14</sup>。

やしなひの 親の名さへも 海の外に  
揚げて嬉しき 山ほとゝきす

### ■慷慨の士・本多晋

晋は、号を可斎と称し、禅を修め歌道を研究し、世事に遠ざかろうとした。花鳥風月を友にし、同好の人々とともに「心の声」を発刊して歌道の普及を図っている。また自邸（渋谷区）を隋縁亭と名付け、これに由来する「隋縁詞藻」という短歌と長歌からなる自薦の歌集を編んでいる。

しかし、国を憂い思う気持ちは時に抑えることができず、明治三十八年（二九〇五）、日露戦争の講和条約に際し、列強に譲歩して賠償を放棄する政府の方針を、国家的な屈辱であるとして「姑息ナル講和ヲ排斥スルノ請願書」という反対意見書を提出し



晩年の本多晋翁

ている。また、このような意見に反し、日露戦争の講和条約（ポーツマス条約）が調印されると、毎日新聞に「本多晋社会上死去の広告」を出し、憂国病の本多晋は、社会上死去したと告げるなど愛国者の一面もあった<sup>15</sup>。



和歌を詠む本多晋

大正十年（一九二二）九月に胃痛がわかり、同年十二月二十六日に亡くなった。享年七十六歳であった。辞世の句は次の通りである<sup>16</sup>。

かはりぬる 世に免も角も なからへて  
思ひ出おほき よみの旅哉

### 三 白石昌字と愛弟子本郷高德

■静六の生家折原家と縁戚関係にあった白石家

埼玉県北葛飾郡桜田村（現久喜市西大輪）の白石

家は、本多静六の生家折原家と古くから縁戚関係にあった。文化六年（一八〇九）に白石家が創立した観音堂の建設に関わる寄附奉納額には「河原井村折原長左衛門」の名前がみえる<sup>17</sup>。白石昌字（一八六二〜一九四六）の妻と本多静六の長兄折原金吾の妻は姉妹という関係にあり<sup>18</sup>、また次兄の折原吾造は昌字の妹に婿入りして、白石勤吾と名乗り、権現堂河岸で舟問屋を経営していた<sup>19</sup>。このようなことから、幼き日の静六も小遣い銭をもらいに白石家によく訪れ、昌字を兄のように慕っていたという。ここでは本多静六と白石昌字及び本多の媒酌により昌字の娘と結婚した愛弟子本郷高德（一八七七〜一九四九）について、晩年に昌字が自ら事蹟をまとめた「経世秘録」（白石家所蔵）をもとに紹介する。

### ■本郷高德のドイツ留学を条件に

本多静六が仲人を務める

本多静六の教え子である本郷高德は、造園「学」の黎明期を支えた先駆者と評され、明治神宮造営の林苑計画を作り上げた神社林の第一人者である<sup>20</sup>。

本多静六が本郷高德に白石昌字の二女徳子との結婚を勧めたのは明治三十六年（一九〇三）のことであり、この頃本郷は東京帝国大学農科大学造林学教室の助手を勤める二十七歳の一青年であった。本郷は明治三十三年（一九〇〇）、東京帝国大学農科大学乙科（実科）を卒業後、群馬県立農業学校の教師を勤めていたが、明治三十四年（一九〇二）、恩師本多静六により農科大学造林学教室の助手として招かれ、学者としての道を歩み始めていた。

本多は本郷に、自分と同じようにドイツに留学し

でドクトルの学位を取得するよう勧め、自分に彰義隊の生き残りである本多晋という後ろ盾があつたように、本郷にも白石昌字の娘徳子と結婚することにより同家の財政支援を仰ぎ、ドイツ留学を実現するよう働きかけたのである。本多は仲人を引き受けるにあたり、白石昌字に本郷のドイツ留学を支援するよう依頼したのであろう。本郷の自伝である『吾が七十年』にも、「外父白石昌字翁の支援を得て独逸留学のことが決定されて居たので」とあり、これを裏付ける<sup>21</sup>。

■白石昌字が埼玉学生誘掖会に寄附を行う

明治三十七年（一九〇四）四月二十五日、白石昌字は埼玉学生誘掖会へ金三百円（三十口）という多額の寄附を行っている。埼玉学生誘掖会は、明治三十五年（一九〇二）三月、本多静六らが発起人となつて渋沢栄一らの協力のもと埼玉県出身の学生を支援するため創立され、寄宿舎の設置及び運営を行っている。おそらくこの寄附は本多静六の依頼を受けて行われたものであり、仲人を依頼した謝礼の意味もあつたのではないかと思われる。



晩年の白石昌字翁

■白石昌字が明治神宮に二万本の献木を行う

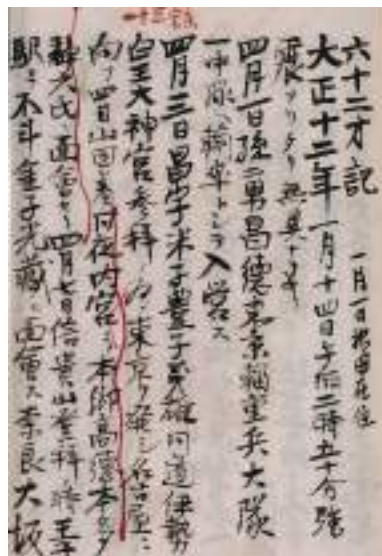
明治三十九年（一九〇六）八月、本郷高德は義父白石昌字の財政支援によりドイツのミュンヘン大学に留学し、幾多の困難の末、国家経済学博士の学位を取得して同四十四年（一九一〇）三月に帰国した。帰国後は再び東京帝国大学農科大学の講師として教鞭を執り、林学実科において森林保護とドイツ語を講じている。また、大正二年（一九一三）三月より千葉県立園芸専門学校（千葉大学園芸学部的前身）の講師を併任し、「吾邦最初の庭園学」を講じている。その後、明治神宮造営局が発足すると、大正四年（一九一五）より内務省神社局嘱託として計画に参画し、大正六年（一九一七）に内務省明治神宮造営局技師に任命されると、講師の職を辞し、神宮造営に専念した。

本郷は造営局参与であつた本多静六や、造営局技手で後輩の上原敬二らとともに、主に神宮内苑の林苑計画を担当しており、天然更新による人工林を計画・施工したことは今日高く評価されている。



本郷高德と妻徳子

このような経緯もあり、大正四年（一九一五）十月十三日、白石昌字は明治神宮へ一万本の榊苗の献納を出願し、同年十一月八日に認可されている。苗木代は金二百円におよび安行の苗木屋に借り受けたという。その後、翌大正五年（一九一六）四月二十五日には、許可を得ている明治神宮への献納の榊苗の内、五千本を神宮事務所へ納め、大正七年（一九一八）五月十日に残分を納付している。



大正12年に伊勢神宮内宮で昌字が本郷高德・本多静六と面会した時の「経世秘録」の記述

■本多静六が次兄の経営する権現堂河岸問屋の件で白石昌字のもとに相談に訪れる

大正十四年（一九二五）二月二十四日、本多静六は神田別宅の白石昌字を訪ね、権現堂分家の次兄白石勤吾（吾造）の件で相談している。この件は同年三月八日に桜田村の自宅でも行われたが、権現堂川の河岸問屋経営が舟運の衰退により振るわなくなつてきたことが背景にあつたと思われる。大正十五年（一九二六）にも「十一月四日、権現堂及下出分家ノ件ニ付本多静六氏・渡邊世仰氏桜田ノ自宅ニ来リ、下出分家夫婦モ同道来リタルモ聞入レズ、午后六時帰リタリ」とあり、次兄のことであるだけに本多に



白石家ノ内回漕部之写真（明治期）

るが、造園家としての本郷の一面が窺える。

■本郷高徳一家が桜田村の迦葉院へ疎開する

戦時中、本郷高徳は義父白石昌字を頼って桜田村の迦葉院に疎開した。「昭和十九年（一九四四）九月六日、本郷徳子・豊子・晴男・友子疎開ノ為メ来リ一泊シ翌九月七日、一同迦葉院へ行き、其夜ヨリ豊子子供兩人共同所ニ住居スル事トナル」とみえる。本郷は終戦後も迦葉院に寓居し、昭和二十二年（一九四七）九月十六日のカスリーン台風による水害に遭遇し、体験を記した手記を残している。

■白石昌字の葬儀で本多静六が弔辞をよむ

昭和二十一年（一九四六）七月三十一日、白石昌字が老衰のため亡くなった。享年八十五才であった。葬儀記によれば、葬儀は八月二日・三日にかけて神式で行われ、三日の本葬には本多静六が伊東町鎌田区の歓光荘から駆けつけ弔辞をよんでいる。

なお、第十六代当主白石昌之氏<sup>22</sup>の言によると、当家の庭には、本多静六が植えたタイサンボク、オガタマノキ、ビワノキ、マリノキ、キョウチクトウなどがあつたという。ほとんどが水害で枯れてしまったが、タイサンボクだけは現存しており、日本一とされる新宿御苑のものよりも大きいのではないかとのことである。

参考文献

- 1 明治四十三年九月七日 本多晋戸籍謄本写（本多家文書）。
- 2 昭和十一年 女医本多鈴子の思出（本多家文書）。
- 3 この日は東京女学校で教師を勤めた外国人女性マーガレット・グリフィスの日記に詳しい。碓井知鶴子著「明治開化期におけるマーガレット・グリフィスの役割」一啓蒙的女子教育の実態解明への手がかりとして―『東海学園大学紀要』二二 昭和六十一年。

4 森下憲郷「婦人伝道者ツルー夫人の協力者出口せい」『白金通信』第一六五号 明治学院大学 昭和五十七年。

5 昭和十五年 本多家々系折原家々系原稿（本多家文書）。

6 4. なお「本多静六自伝 体験八十五年」実業之日本社 平成十八年一〇〇頁には「（鈴子は）六歳のときからミス・ツルースという英国人の女宣教師の家に預けられていた」とあるが、これは明治九年に原女学校の教師として赴任するアメリカ人宣教師メアリー・ツルー夫人と取り違えたものであろう。

7 2及び5。

8 『本多静六自伝 体験八十五年』一四九頁。

9 秋山龍三『日本女医史』日本女医史編纂委員会編 日本女医会本部発行 昭和三十七年。松田誠「高木兼寛の医学 東京慈恵会医科大学の源流」東京慈恵会医科大学 平成十九年所収「かつて慈恵に在学した興味ある人物 その三 最初の女子学生 松浦里子と本多鈴子」その四 慈恵病院女医第一号・ドクター岡見京子。

10 野田市郷土博物館「生誕一四〇年 染谷亮作と川間村へ農業と教育の理想を目指して」展示図録 平成二十八年 二〇頁。

11 大正十年 東京女子医学専門学校奨学資金寄附願・仮証（本多家文書）。

12 「婦人の友」第十六巻第八号 大正十一年。

13 以下は注5及び本多晋「喘余吟録」（山崎有信著『彰義隊戦史』隆文館 明治三十七年に採録）。

14 本多晋「隋縁詞藻」本多博発行 大正十一年 上編一八九頁。

15 本多家文書。

16 本多晋「隋縁詞藻」本多晋翁略伝三頁及び下編一九九頁。

17 吉本富男・野口三男『白石家観音堂と百観音温泉』白石昌之発行 平成二十二年 八四頁。

18 今泉宣子「明治神宮 「伝統」を創った大プロジェクト」新潮社 平成二十五年 一三七頁。

19 5及び「白石家ノ内回漕部之写真」（白石家所蔵）の裏書。

20 下村彰夫ほか「本郷高徳 造園「学」の黎明期を支えた先駆者」『ランドスケープ研究』五九（一） 平成七年。明治神宮創建を支えた心と叡智」明治神宮社務所 平成二十三年 二十二頁。

21 「明治神宮史関係資料翻刻 本郷高徳「吾が七十年」」神園」第八号 明治神宮国際神道文化研究所 平成二十四年 一六九頁。

22 平成二十八年十月二十五日にお亡くなりになられた。生前氏には本稿の作成にあまり多大なるご協力をいただいた。故人のご冥福を心からお祈り申し上げます。

とつても心配事であったことが窺える。

■本郷高徳が園芸用苗木畑の図面調整に携わる

昭和四年（一九二九）二月二十二日、白石家では、昌字の孫昌寿の意を受け、自宅果樹園の一部を改造して園芸用の苗木を植えることになった。このため本郷高徳と協議して図面を調整している。三月中旬に設計が出来、四月十三日に果樹園小屋の移転を決定。果樹を縮小して苗木畑の拡張を行っている。園芸用苗木畑がどの程度の規模であったかは不明であ



# 渋沢栄一と本多静六

渋沢史料館館長 井上 潤

渋沢栄一と本多静六は、共に埼玉の出身というこ  
ともあり、主に埼玉に関係する事業等でお互い支え  
合っていた。ここでは、この二人の関係を物語るエ  
ピソードを紹介したい。

まず、二人の出会いについてである。

本多が十五・六歳の頃、学問をしようと上京した  
際に、当時、東京深川福住町にあった渋沢邸の玄關  
番をしていた義兄・藤村久のつてを頼りに、渋沢家  
で色々世話を受けようと思ひ、二度訪問した。ただ、  
二度とも玄關払いにあい、その時の憤慨は甚だしく、  
「二度と渋沢の門なぞくぐるものか！」と決心して  
以来、帝国大学農科大学を卒業するまで一度も渋沢  
の世話にならなかった。

その玄關払いから十年程経ち、帝国大学農科大学  
の助教授になった本多は、育英事業を行う埼玉学生  
誘掖会をつくることで初めて渋沢に会ったのである。  
自らの苦学生時代に、同窓生河合鉢太郎（後の林学  
博士）を通じて、愛知の育英事業を知り、何とかし  
て、将来このような事業を立ち上げたいと思ってい  
た本多は、その後、帝国大学の助教授となって給与  
を貰うようになるや、埼玉の実業家竹井澹如・諸井  
恒平・吉田市十郎等に相談したところ、賛同を得た。

さらに、竹井が渋沢に相談し、その結果を本多が改  
めて聞きに行くことになったのである。本多  
は二日にわたって深川の渋沢邸を訪問したが、渋沢  
が不在であったり、都合がつかないとのことで面会  
を断られた。しかし、しつこく粘った甲斐もあり、  
ようやく面談がかなった。最初の内は無謀な計画と  
して突き放されたが、誠実に説明を繰り返すなかで、  
理解を得、出資してもらえることとなったのである。  
渋沢は約束通りの出資に応じたほか、その後も多  
額の寄附をしている。

設立された埼玉学生誘掖会の初代会頭を渋沢が務  
め、理事から寄宿舎が出来た際には舎監を務め、そ  
の後、渋沢を継いで二代目会頭を本多が務め、共に  
同会の発展に尽力したのであった。

次は、渋沢が、本多を実業界に誘った話である。  
実は、日露戦争後の実業界が活況を呈していた時に、  
渋沢が本多を実業界に引入れようとしたことがあっ  
た。東京田園調布等の宅地開発を中心事業とする田  
園都市株式会社の社長就任を要請したのである。し  
かし本多は、学者を買い被りすぎていると言いつ  
ている。ただ、その後も日新護謨（ゴム）株式会社  
創立の時も、渋沢より依頼があり、断ったが、この

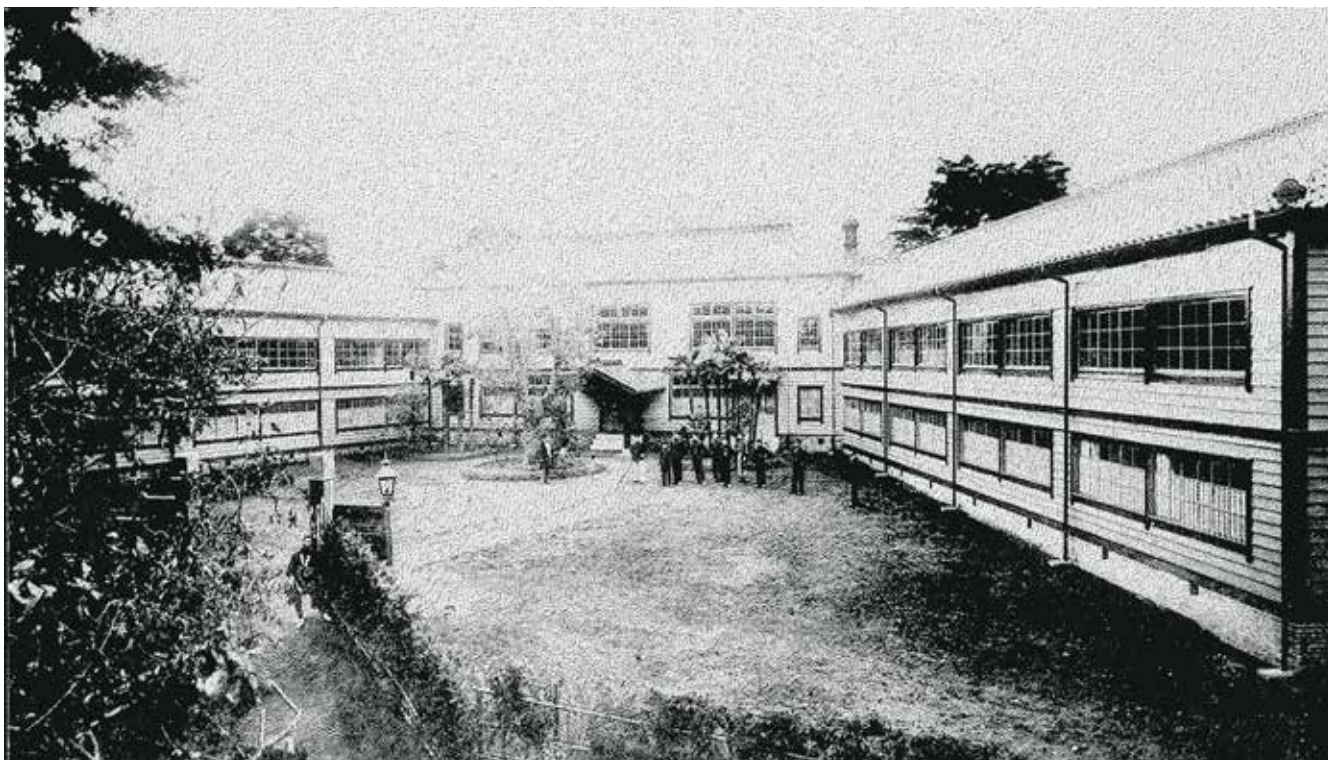
時は渋沢が大学総長に話をしたので、本多は渋々顧  
問を引き受けている。

また、本多が全国の林業振興を目的とする帝国森  
林会を大正八年（一九一九）に創立を企画した際  
には、渋沢は、その趣旨に賛同し、設立を援助した。  
大正十年（一九二二）、財団法人の認可を受け、渋  
沢は自らが会費を納め、設立当初より没年まで会  
員であったと同時に、運営の維持に必要な会員募集を  
買って出て、知名の財界名士を会員に集めるために  
尽力したのであった。

本多は渋沢に、一身上のことでは絶対世話になら  
ないと決心したことを渋沢の前で言い切ったので、  
遂に一身上のことでは一度も頼みに行つたことはな  
かった。学生のため、国家のためということだけに  
限り、渋沢にいろいろ世話になったのである。

渋沢に対して、最初は非常に冷淡な感じを受ける  
が、一旦話が分かったとなると真心をこめて尽して  
もらえる人という思いを抱いていた。こちらの誠意  
を知つて一度仕事を引受けると、渋沢程熱心に世話  
してくれる人はなかったと言いつ切るほどであり、尊  
敬の念を強く抱きつづけたのである。

写真上：渋沢栄一（1840～1931）  
写真中：深川福住町の渋沢栄一邸  
写真下：埼玉学生誘掖会第一寄宿舎  
（明治35年・1902）



# 日比谷松本楼が今に伝えているもの

日比谷松本楼社長 小坂 哲 瑯

此の度本多静六先生のご生誕百五十年の記念誌に投稿のご依頼を頂いた。

申すまでもなく私も日比谷公園に極めてゆかりの有る者にとつて先生は尊敬すべき大切な方である。

そして先生についての詳細な事は、今迄多くの著名な学者によつて数多く語られているので、私はごく限られた範囲、即ち私どもにとつて特に関係の深い事について記述させて頂く事としたい。

## 「首かけの銀杏」について

先生が日比谷公園設計の中で特にご心労を煩わされたのが此の大銀杏と云われている。当時日比谷の交差点近くにあった樹齢四百年位と思われる老大木を、先生は何とか新生の公園の中央に移植されたいと思われたが幾多の困難があった。

当時、木の高さは約二十二メートル、幹の廻りが約六メートル、樹齢は推定四百年。此の大木の移植は到底無理という事で払い下げられ、伐採されかけていたものを、先生は何としても新しい公園の中央に移植したい、と考えられ、当時の市、東京市参事会議長の「星亨先生」と交渉したが、議長は「無理」と大反対された。従つて先生は「ご自身の首をかけ

ても此の木の移植を成功させる」気概を持たれ、多難な折衝の結果、遂にそのご意見が認められて、成功したと言われるいわくつきの「名木」なのであった。

此の大銀杏は、公園開園時には日露大戦の戦捷祝賀記念大会が眼前の大広場で開催されたのを眼下で見、更に此の日露大戦の講和の諸条約が我が国に不利との事で、河野広中氏や小川平吉氏主催の反対運動、そして有名な「日比谷焼討事件」の大騒乱も目撃している。

亦、大正三年（一九一四）には「内閣弾劾国民大会」が隣接の松本楼を中心に多数の群衆が集合した際も同様に群衆に囲まれている。

他方、平和な行事としては、眼前の大広場で毎年正月挙行された東京市主催の「大凧上げ大会」の活況を見下ろしてもいた。此の大広場は平和な時代の近隣の会社の軟式草野球や小・中・高の生徒達の運動会での子供達の喜びをじつと見下ろしていた。

特筆すべき此の大広場で「伊藤博文、大山巖、山縣有朋、大隈重信氏」等の国葬が行われたことである。

なお、此の巨木は、単に周囲の催時のみ睥睨して

いたのではなく、自らも大きな「ダメージ」を受けている。即ち昭和十九年（一九四四）頃、戦争が激化し、都市の空襲が増加した為に近隣地の「躑躅」に高射砲陣地が構築された際に、射撃の邪魔になるとの事で大切な大銀杏の上部が伐採される事件が惹起した。

更に昭和四十六年（一九七一）十一月十九日、沖縄の返還闘争で日比谷公園に蝟集した過激派の学生集団に因る「松本楼放火事件」で、建物から十メートル余りの此の大木の側面がすっかり焼けただれってしまった。この事は本多先生のご努力によつて移植された此の名木の過去最大の苦難であった。幸いにも公園課の方々の大変なご努力に因り、何とか復活する幸運があった。そして今日もその焼け跡の傷を残しながら敢然と聳えている。

戦前、戦中、戦後と都市そのものが大変革を遂げており、数えきれない困難な状況が数多くあったと同様に公園自体も大きな変革の波をかぶってきているが、先生の御偉業によつて培われてきた此の公園の輝ける歴史は着実に続いている。



写真1 日比谷松本楼と「首かけイチョウ」。中央下が説明板（下記参照）



写真2 日比谷松本楼と「首かけイチョウ」（紅葉の頃）

右の文章は「首かけイチョウ」の  
説明板にある案内文

### 首かけイチョウ

この大イチョウは、日比谷公園開設までは、日比谷見附（現在の日比谷交差点脇）にあったものです。

明治32年頃、道路拡張の為、この大イチョウが伐採されようとしているのを見て驚いた日比谷公園生みの親、本多静六博士が東京市参事会の星亨（ほしとおる）議長に面会を求め、博士の進言により移植されました。

移植不可能とされていたものを、博士が「首にかけても移植させる」と言って実行された木なので、この呼び名があります。

# 学習まんがの制作を通して感じたこと

漫画家 比古地 朔 弥

私は、埼玉県農林部森づくり課発行による「学習まんが 本多静六博士物語」の漫画制作を担当させて頂いていただきました。平成二十七年一月から埼玉新聞の折込タブロイド誌上にて、週刊六回連載。のちに単行本にまとめられ四万二千部を発行、県内の小学校や中学校などに配布されました。今回の漫画単行本は非売品で一般には流通しておりませんが、学校や図書館の一角に場所を与えられ、次世代の目に触れる機会は決して短い訳ではないと望んでいます。

こうして子供たちへ向けた作品を手がけられて、とても本望なお仕事でありました。漫画家はエンターティナーやアーティスト、職人など様々な気質を持つて表現する人がいますが、私はどちらかというと伝記者タイプのように、出来るなら、大事なものを伝え残す作品を描いてみたいと願っているからです。幅広い層に分かりやすく伝達するツールとしても、漫画は適材だと思っています。

本多静六博士の功績、また哲学や人物像は、知る人ぞ知るといった、専門分野の人間以外はなかなか知りえない存在であったかと思えます。恥ずかしなから私も、今回の漫画企画で初めてお名前を知りました。だからこそ、後世に伝える価値のある、また

伝えなければいけない大切なことがたくさん宿っていると、描き甲斐を感じながら筆を進めた次第です。

執筆にあたっては、遠山益先生のご協力をいただき、著書の『本多静六 日本を育てた人』を元にした他、本多静六博士ご本人が残した数々の著作も拝読し参考にしました。何十年前前に書いた本なのに、現代でも出版され支持を得る本を残されている、この点も私にとっては尊敬や憧れを感じる部分です。

博士の文章は非常に気さくといえますか、親しみ溢れる文体で、読みやすく面白くおかしく、かつ分かりやすい。先に目にした写真の肖像は威厳があつて、少し硬い印象でしたので、ちよつと意外でもありました。著作の中には当時やり取りした会話や感じたことなども細かく描写され、シーンや登場人物がリアルに伝わってくる。これが漫画という人物描写を必要とする表現媒体にあたって、大いに助けになりました。数々の人生訓、哲学は、そのままテーマや決め台詞にもなります。

偉人伝というのは、得てして波瀾万丈の生涯が多く、時に不幸な末路を迎える人物も珍しく無いかと

思います。その点、博士は山あり谷ありの人生を送りながらも、晩年は磐石で何とも穏やか。家族や子孫に恵まれ、経済の不安もなく、社会との関わりもマイペースで継続していく。健康で長生きされ、まさに理想の晩年ではありませんか。この点は、偉人伝としてはちよつと珍しいかと思いました。

充実感や達成感も大いに得た人生だったであろうと思います。そこには成功も失敗もあれど、常にたゆまぬ「努力」を精一杯されて来たのでありますから。辛い努力を続けるのはなかなか怠け者には真似できませんが、努力をする対象があつた、つまり「やりがい」に恵まれていた方であつたんだなとも思います。

私は秩父に生まれ育ち、現在も生活しておりますが、博士は埼玉の中でも秩父と関わり深い方であつたのには、不思議な縁の巡りを感じました。奥秩父には東大の演習林があり、私はこれまで「どうしてこんな山奥に、天下の東大が活用する場所があるのかな」などと思つていたのです。秩父のシンボルである武甲山のセメント採掘には、博士の助言があつたということも知りました。私の親戚には林業関係



原作・監修 遠山益  
 まんが 比古地朔弥  
 発行 埼玉県農林部森づくり課  
 制作 埼玉新聞社  
 規格 四六判 百六十四頁

者もおり、漫画を描いた時は、「博士の漫画を描いたんだって！」と喜ばれました。

現在は、産業的にも秩父は苦しい時を迎えています。常に前向きに問題に取り組み、解決策を見出して来た博士だったら、一体どうしただろう？お知恵を拝借したい、そんな風にすがりたい気持ちがあふぶこともあります。

時代は常に移り変わり、経済も栄枯盛衰、未来永劫安泰な産業というのは存在しないのかもしれない。しかし、自然は地球が健康に存在する限り、繰り返し続ける命のサイクルがあります。博士が迷うことなくたゆまぬ努力の道を歩み続けられたのは、山林を通してその真理に触れていたからではないだろうか、そんな風にも思うのです。

博士の残した功績の中で、一番個人的に好きなのは「人の手を入れずに自然の力で永遠に存続する」ことを主眼とした明治神宮の森です。経済用の山林を手がける一方で、こういう真逆の発想ができるのは柔軟性があり、様々な価値観に対応できる器の大きさを感じました。

人生訓的な面で一番すごいなと敬服したのは、晩年に余分な財産を大きく手放されたことです。しかも貧乏暮らして散々苦労してお金を貯めて来た人が、その執着に囚われなるとは、そう誰にでも出来ることではない。私にはまさに偉人と感じるエピソードでした。

「公園」という施設に関しては、最近改めてありがたみを感じる体験をしました。私は食べ歩きが好

きで、都内でも良く美味しいものを求めてお店のしごをしたりします。テイクアウトの戦利品でランチをする時は、どこか野外でゆっくり食べられる場所を探します。休憩スペースのベンチや神社仏閣、デパートの屋上、そして都心の大きな駅でも、ちよつとした公園はたいいどこにでもありますから。

先日は銀座三越に朝一で駆けつけ、限定販売のケーキをゲット。夏なので長い時間持ち歩けず、どこかで食べてしまおうと思ったものの、途方にくれました。銀座のど真ん中では、さすがに腰をおろして食べる場所などありません。ビルの隙間に小さな公園も無いなあと、頭の中で検索してハッと思い出しました。ちよつと足を伸ばせば、あの日比谷公園があることを。

木陰のベンチで心字池を眺めながらのんびりケーキを味わい、救われた気分でも本多静六博士に思いを馳せました。誰でも無料で自由にくつろげる野外のスペース、公園とは実在にありがたい存在なのだなどと初めてしみじみ感じました。しかも銀座、皇居の隣という都心の一等地に作ったというのは改めてすごいことだと、百年以上たった今でも現役でその役割を果たしているのですから。

博士の漫画を描いてから、日比谷公園に来る機会がある時は、お参りをするかのように首掛け銀杏を眺めて帰るようになりました。歴史の一ページと現代を静かにつないでいる、その佇まいと貫緑は、博士の面影が宿っているかのような気持ちがします。

# 本多静六博士が埼玉県に遺してくれたもの

## — 本多静六博士奨学金と本多静六賞を通じて —

埼玉県農林部森づくり課 主査 山崎 宏 剛

### 一 はじめに

平成九年度に閉鎖された旧中津川県有林事務所（埼玉県秩父市中津川地内）の敷地内に『樹徳千載』と題された人の背丈よりも大きな石碑があります。その碑には、中津川県有林の沿革と本多静六博士の功績をたたえる文字が刻まれています。

ここで敢えて紹介するまでもなく、博士は本県の久喜市（旧菖蒲町）に生まれ、数多くの功績を残した郷土の偉人です。本稿では、その中でも、博士が東京帝国大学教授を退官後、本県に寄贈した広大な森林が遺してくれたものを中心に御紹介します。

### 二 中津川県有林

#### (一) 中津川県有林の概況

中津川地域は、埼玉県の西部、秩父市中津川に位置し、西を長野県、北を群馬県と接する標高六百メートルから二千メートルの山岳地帯で、日本百名山の両神山やシャクナゲと亜高山帯性の原生林で有名な十文字峠、紅葉やツツジで有名な中津川渓谷も区域内にあり、全域が秩父多摩甲斐国立公園に指定されています。

中津川地域にある県有林は、博士から寄贈された二千六百三十二ヘクタールの森林を母体とし、その後、一部隣接地の買収や寄贈などもあり、現在は三

千十ヘクタールの面積となっています。

森林の現況は、ブナ、シオジ、カエデ、モミ等の天然林が県内有数の規模で残っており、その中でも「大山沢のシオジ林」は、平成二十五年三月「埼玉県指定天然記念物」に指定されるなど希少な森林が分布しています。また、人工造林地は総面積の約三十九パーセントを占め、スギ・ヒノキ・カラマツ等が植えられています。

#### (二) 彩の国ふれあいの森

この中津川県有林を、県民が自然とふれあいながら森林や林業について理解を深める場として、平成六年に「彩の国ふれあいの森」として一般開放しました。

拠点地区には森林科学館（写真1）が整備され、森の成り立ちや特徴を学んだり、木工工作などを楽しむほか、秩父にゆかりのある人物として「本多静六博士」や「平賀源内」を紹介しています。また、平成二十八年十月三十日に開催した紅葉まつりでは、博士の生誕百五十年記念特別展示も行われました。



写真1 彩の国ふれあいの森 森林科学館

### 三 本多静六博士奨学金

#### (一) 奨学金の沿革

昭和五年（一九三〇）十一月五日、本多静六博士、

御子息の本多博氏、秘書の鈴木清次氏の三氏から、

条件を付して（表1）所有森林寄付の申し出が県にあり、県参事会では、その申し出の翌々日の十一月七日に寄付の受け入れを議決し、昭和七年四月一日に「中津川県有林管理条例」と「本多静六博士育英基金条例」（以下、「基金条例」）を施行しました。

そして、寄付希望条件に従い、同年から林道開設工事に着手し、昭和十一年（一九三六）から素材生産事業を開始しました。

しかしながら中津川県有林は、当初から管理経営のための投資が多く、育英基金の積み立てはなかなか困難な状況でした。

そのような状況の中、昭和二十五年（一九五〇）夏、八十三歳の博士が視察と地方遊説のため来県され、県有林も御覧になりました。その際、県は県有林の管理経営と育英事業について、博士に今までの状況を申し上げ、御理解いただきましたが、博士の熱い思いに触れ、育英事業の早期実現への思いを新たにしました。

管理経営に二層の力を尽くしたところ、昭和二十六年（一九五二）には前年度の繰越金とあわせて寄付希望条件の百万円に達し、博士に喜んでいただける日も間近でしたが、翌二十七年一月に博士の訃報に接することになってしまいました。そして、当時の大澤知事か

ら早急に育英事業を実現するようにとの指示があり、直ちに三月の県議会に基金条例の一部改正案と本多静六博士奨学金貸与条例案を提出し、三月二十二日に議決され、翌四月二日に施行しました。

そしてついに、昭和二十九年度から奨学金の貸与を開始しました。

#### 希望条件

- 一、本林中ノ一部中津川本流ニ沿ヒタル景勝地ノ森林ハ風至林トシテ永ク保存セラレ且林道開削其他ニヨリ該地方ノ開発ヲ図ラレ度事
  - 二、本林御経営ノ純益ノ一半ヲ積立テ利殖シ置キ総額壹百万円ニ至リタル上ハ秀才教育ノ財団法人ヲ組織セラレ度キ事
  - 三、右財団八年々生ズル利子ノ四分ノ壹以上ヲ元資金ニ加ヘラレ度キ事
  - 四、該財団ノ元資金ヨリ年々生ズル利子ノ四分ノ参以内ヲ以テ先ツ苦学生中ノ秀才ニ補助シ進デ一般教育並ニ学術研究ノ資ニ供セラレ度キ事
- (原文中漢字のみ現代漢字に置き換え) (表一)

#### (二)奨学金の貸与

貸与を開始した当初は、奨学生一名、奨学金は月三千円の貸与でした。その後貸与条例の改正が数回行われ、現在は月額三万円以内となっています。

また、入学金に対応するため、平成十八年度からは月額奨学金とは別に入学一時金(三十万円以内)の貸与を開始しました。いずれも無利子の貸与です。

#### (三)基金の管理

基金の管理については、博士の寄付希望条件に従い、基金条例の中で次のとおり定めています。

基金に積み立てる額は、「人工林の立木売却代金の百分の三十に相当する額に天然生林の立木売却代金から当該売却に要した経費を差し引いた額を加えた

額とする。」(基金条例第二条抜粋)。

また、基金から生じる運用益の処理については、「基金の運用から生じる収益のうち、当該収益の四分の一に相当するものについては、…この基金に編入するものとする。」(基金条例第四条抜粋)としています。

このように、基金は寄贈された森林の立木売り払い収入と基金から生じる運用益の四分の一が積み立てられ、運用益の四分の三が奨学金に要する経費となります。

#### 四 本多静六賞

##### (一)本多静六賞の創設

森林に関する学術研究や実践活動に尽力し、林学教育及び学術書の執筆並びに森林や公園の造成及びその指導等を通じて社会に貢献した博士の精神を今に伝える個人又は団体を表彰することにより、博士の功績をたたえとともに、緑と共生する社会づくりを推進することを目的として、県では平成十九年度に「本多静六賞」を創設しました。

受賞対象者は、埼玉県にゆかりがあり、学術研究又は実践活動により緑と共生する社会づくりに貢献した個人又は団体です。

##### (二)歴代の受賞者

第一回の賞の選考は、遠山益お茶の水大学名誉教授を委員長とする選考委員会で行われ、博士の孫にあたる故本多健一氏には顧問として選考委員会に加わっていただきました。

これまでに六個人・三団体が受賞し、その顔触れ

も林業経営者から森林ボランティア団体、研究者等々、多角的な学術を開拓された博士のように様々な分野で活躍されている方が受賞されています。

そして、博士の生誕百五十年にあたる平成二十八年、賞は節目の第十回を迎えます。(写真2)



写真2 第10回本多静六賞 募集チラシ

#### 五 おわりに

本多静六博士奨学金は昭和二十九年度の貸与開始から平成二十七年末までの六十二年間に累計二百七十三人の学生の修学を支援しています。

博士から寄贈された森林は、寄付希望条件により保護だけでなくその活用によって、美しい森林と恒久的な奨学金制度を私たちに遺してくれました。

冒頭に紹介した中津川県有林碑に刻まれた『樹徳千載』の意味は「樹の力は千年先にまで及ぶ」とのことだそうです。まさに樹を育み、樹とともに歩んだ博士の功績・遺志は、未来を切り拓いていく若者たちに千年後までも引き継がれていくことでしょう。

埼玉県では、これからも博士から寄贈された森林の管理・活用を適切に行うとともに、博士の精神を今に伝える個人又は団体を表彰することにより、博士の精神を継承してまいります。



# 埼玉学生誘掖会の思い出 ―市ヶ谷砂土原で学んだこと―

講談社社友 長谷川 清

早春のある日、誘掖会ゆうえきの元寮長と市ヶ谷の外濠公園で会った。ここは飯田橋から市ヶ谷まで都内多数の桜の名所で見晴らしも良い。「あの一口坂の先、理科大の左上やや登ったところに誘掖会の寮があったのです」と私。

この辺は新興ビジネス街の一等地、美食家も集まる。牛舌焼、中華は名物。二人が出会ったのはつぎの誘掖会卒業、同期生の会合をどうするか相談で、会の名称は亥年いとしの卒業なので猪友会ちよめかい。二人の出会いには靖国神社大鳥居の右手だった。

元寮長は原子力事業の東芝を定年退職、石坂泰三（一八八六―一九七五）（元誘掖会会頭）を尊崇していた。労働争議で社長室の机にどつかと乗った労組代表が石坂の額にジジッと煙草の火を押しつけても一歩もひかず、争議をとりまとめた大先輩だ。

## 教育と誘掖と

誘掖会以前は埼玉育英会、学友会などの名称を用いた。会の百年史では扶掖（援助）誘導を一語とした誘掖と決まった。これはラテン語 educatio (e=out, and ducere=lead) で外へ引き出し、導へど、よく対応している。以上は「哲学字彙」(明治四十五年(一九一二))による。一方、孟子では、「君子に三楽有り……天下の英才を得て之を教育

するは、三の楽しみなり」(「字通」(白川静、平成八年(一九九六))、誘掖は導き助ける(同)。前掲の「字彙」では「教育の字、始出于孟子盡心上」とある。education (英語) は、導き、才を引き出し、これを助けるといふ、まさに援助誘導の意味、伝説の教育ママに育てられた過激派孟子の語「教育」よりは「誘掖」が正しい訳、と思う。

## 人生劇場のスタート

逢坂おうさか、なんとロマンチックな地名ではないか。दैい坂とも、むかえ坂とも読める。近くに鰻坂うなぎさかもある。

大学二年の秋、小生は祖父と逢坂を登り、小泉吟三郎舎監に面接、入寮を申し込んだ。「飯田橋二丁目、大神宮下で家内の兄が食堂と区会議員をやっていますから」とかいってハクをつけていたが(日本医科大学)下宿もやっていますといわなかった。

どういふ事情で誘掖会の存在を知ったのか記憶にない。電車通学で四苦八苦しているのを見かねて、誰か教えてくれたのか。祖父の話では弟、長谷川安兵衛も在寮していたという。学生寮が最良の教育インフラというのは、「空気」(山本七平氏の指摘)あるいは日本文化の根っこにある米作民族の行動様式、生涯の得難い盟友も得られる宿舍でもある故だ。

本多静六先生は、若いころ実業家渋沢栄一男爵のご自宅をたずね、郷土の苦学生のため寄宿舎をつくりたい……と援助を求めた。一介の研究生がずいぶんな度胸をしてるわい、と思った男爵は「まず、君自身が資金を出してから他人に頼め」ときりかえした。何しろ第一銀行をはじめ二百を超えるという会社のオーナー、先ず人物を見る。そこで本多先生は男爵にその場で自分の年収の三分の一の現金をさしだした。流石に渋沢男爵は胸をあつくして、全面協力を約し、寄宿舎の初代会頭(二代目は本多先生)を務めた。日清戦争(明治二十七年・一八九四)前の頃と思う。

## 青春彷徨

「人生劇場」は自分が主役、誰も助けてくれないし、頼る訳にもいかない。挫折、失敗、低迷は誰にでもある。人は言葉の動物、本多先生のように強い意志と信念に基づいて座右銘とするのは実に賢い。扁額といって横長の額をかかげる旧家もある。子どもどころ「努力即幸福」と箸入れの下に横書、にやりとされた。父は床の間の柱に「金のなる木は働かせ木」と書いてある。小生はSichzeitlichkeit(時をよめど)、間もなく米寿である。

人生劇場で、最初に親元をはなれ東京暮らしと



猪友会での本多博士ゆかりの地訪問（本多静六博士生誕地記念園）（平成19年）。この訪問が猪友会の解散式となった



埼玉学生誘掖会砂土原寮（平成11年）

砂土原寮は平成13年3月末をもって閉鎖され、その跡地売却資金を原資とする奨学金給付事業に転換して今日に至っている。（誘掖会HPより）



埼玉学生誘掖会の旗のモチーフとなったトチノキの葉と実（実は玉状になることから、埼玉の「玉」とかけている）

- 1 外濠公園は四ツ谷までの通称で、また正式名は決まっていますがこのまま通称で。
- 2 Stich (目)、zeit (時間)、lich (的)、keit (名詞化)。Stichzeitlichkeitの思想は本多博士の思想と共通点を感じます。
- 3 7月15日はバリ祭（フランス独立記念日）。この日、お向かいの日仏学院は夜も開放で美女もいっぱい。おしかけた猛者もいた。



公益財団法人  
埼玉学生誘掖会の会旗  
（誘掖会HPより）

なった誘掖会は、楽しく、嬉しく、心の宝物のようで、多くの卒業生がその想いをつづっているが、悲しい物語もある。  
アルバイト先のおなご恋やまいに落ちた秀才、神楽坂の焼鳥屋（推定）の娘に手をつけ、やきをくらった法学生、二人とも静かに退寮している。「美は乱調にあり」、青春は、甘く、ほろにがく、せつない。

### 寮のくらし

明治三十七年（一九〇四）に完成した寄宿舎には、図書室、柔剣道部、水泳部、弓術部なども設けられ、大正六年（一九一七）には寮生百人を超えた。その後の消長で時代の波にもまれながら、埼玉健児数千人以上を育てている。

小生が在寮のときは鉄筋コンクリート二階建て、二十室、この内三人部屋が二つで、いっしょに飲んで

だり、だべったり、休日は電話番か、社会人として必要な？各種のゲームを楽しんだ。なかには麻雀の名手で、アルバイト代わりに外で稼いでいた人もいた。問題は人間関係だが、全く水平的だった。

寮生活は朝六時半起床。八時始業の学生は朝食して寮を出る。朝夕食付で月六千円と、相場の半分分の格安生活。お風呂は銭湯へ通った。風呂の行き帰り、神楽坂を横断するのも楽しみで、雛妓と出くわしたり、まれにおでん屋で一杯（勿論友人と）やるのも風情があった。

一番お世話になったのは賄の安田夫妻、そして人生相談の口実で当座の銀行役をお願いした舎監夫人であった。楽しみは、食べる、だべる、そして散歩で、門限の十一時過ぎにはお隣の安田生命寮を通じて乗り越える。

発信源不明の情報も多く「日仏学院（寮の向側）の階段には授業待ちの美女がいっぱい」<sup>3</sup>とか「料亭の大看板を無断で持ち帰り、二、三日借用しました」。田中耕太郎（一八九〇〜一九七四）最高裁判所長官様、貴殿のとなりにこんな若僧が暮らしていました。

元寮長とは「本多博士の古里を訪ねて、猪友会四十八周年総会で解散」（平成十九年）と決定した。

余筆／西郷隆盛「見孫の為に美田を買わず」（明治四年作「感懐」）は洪沢、本多両先生の思想に通じる。

トチノキ（別名七葉樹）は高さ三十五メートルに育つ巨木。誘掖会の旗のデザインの元で、本多博士の黙示と考える。

# ようこそ本多静六記念館へ

久喜市菖蒲総合支所副支所長 渋谷 克美

## ■没六十年を記念して記念館を整備

本多静六記念館（以下「記念館」という。）は、本多静六の様々な魅力を多くの方知ってもらおうと、没六十年記念事業の目玉として、平成二十五年四月に久喜市菖蒲総合支所の五階にオープンしました。旧菖蒲町庁舎の議場をリニューアルしたもので、展示面積は約二百十平方メートルあります。開設初年度の入場者数は、約一万二千人、以後毎年約九千人の方が見学に訪れています。多くは県内の方ですが、遠くは東北・関西方面からも見学に訪れています。記念館の整備は、株式会社丹青社が中心となって設計から施工までを行いました。役所側では当時文化財保護課に席を置いていた私が事務担当者となりました。展示する資料選びや原稿書き、写真やビデオの撮影、関係機関への資料提供依頼等々、一年間という限られた時間内でのあわたたしい作業が続きました。

## ■自筆の手紙やノート類などを展示

記念館では、主に本多家と生家の折原家から寄贈された資料を中心に展示しています。中でも、東京山林学校時代の自筆の教科書や、兄金吾に宛てた手

紙は当時の生活の様子を知る上で貴重なものと言えます。また、海外渡航先から自宅に送った絵葉書はカラフルで目を引きまします。その他にもシルクハットや双眼鏡など、本多静六が愛用した品々が展示されています。記念館ではこうした資料のほか、公園設計に携わった全国各地の公園、温泉地、観光地等から送ってもらった大型ポスターやパンフレット等、合計約三〇〇点の資料を常設展示しています。

また、菖蒲総合支所の周辺では毎年六月に「あやめ・ラベンダーのブルーフェスティバル」が開かれています。特にこの時期多くのお客様が記念館を訪れています。初めて記念館を訪れた方の中には、「こんなすごい人が埼玉にいたのか」「この次は友人と見に来ます」など感想を書かれていく方もいます。展示ケースはバリアフリーにも配慮していますので、車椅子の方でも安心して見学を楽しむことができます。（開館時間等は本文48頁参照）

## ■天井のない日比谷公園の模型

記念館の展示物の一つに、日比谷公園の模型があります。日比谷公園は本多静六が中心となって設計し、明治三十六年（一九〇三）に開園した日本最初

の洋風公園です。模型は四百分の一の大きさで、面積約十六ヘクタールの日比谷公園が、畳一枚半ほど（約一・三×一・九メートル）の台座に収まっています。

模型のすぐ側には本多静六が描いた公園の設計図（平面図）があり、基本的に開園当時の姿と変わっていないことがわかります。

模型作成の中間検査のため製作会社を訪問した際、担当者が「本多静六のことは知らなかったが、こうした有名な公園の模型製作に携われたことは光栄でした」と語ったことが印象的でした。帰り際、担当者から「いたずら防止のために模型の天井をFRP（強化プラスチック）で覆う必要はありませんか」という話が出ました。私は「それは必要ないと思いますよ。本多静六も、議員からの『公園の門に扉がないと花や木が盗まれてしまうのでは』という質問に、『公園の花弁を盗まれない位に国民の公徳心が進まなければ日本は亡国だ。公園は公徳心を養う教育機関の一つだ』として、あえて扉は付けませんでしたから、それと同じように覆いは必要ないでしょう」と答えました。因みに、オープンから四年を過ぎた現在も、一度もいたずらをされた跡は見当たりません。



① 「生い立ち」を紹介するコーナー

車椅子の方でも間近に展示物が見られるよう展示ケースの下は空間となっている

② 「公園設計に関する業績」を紹介するコーナー

床面に描いた日本地図で80か所を紹介しているほか、コーナーを取り囲む円柱形の壁面（フォトサークル）では現在の公園の様子や設計当時の平面図を写真で紹介している

③ 展示室の様子

写真右はフォトサークル、床面の模様は日本一の巨樹「蒲生の大クス」の大きさを絨毯の色で表現している。壁面上部の樹木のデザインは明治神宮の森をイメージしたもの

④ 中央は本多静六が好んで着用した詰襟服（複製）、ケースの右側には愛用の双眼鏡が、左側にはシルクハットが展示されている

⑤ 手前が日比谷公園の模型（400分の1）、写真上部中央の図面が設計時の日比谷公園の平面図



■複製できなかった大礼服

展示品の一つに、ガラスケースに入った詰襟服があります。本多静六はドイツ留学の帰途、友人からもらった詰襟服を自分流にアレンジして日常的に着用していたといいます。

寒い日は下着を重ね着しコートは着用しなかったといいます。屋外での仕事が多かった本多にとって、重宝なものであったに違いありません。

しかし、残念なことに遺品の中には現物は残されていませんでした。そこで当初は、遺品中の文官大礼服のレプリカを展示する予定でした。しかし、服飾専門学校や映画の衣装製作会社等、どこに聞いても、レプリカの製作を引き受ける業者は見つかりませんでした。それだけ希少な材料と高度な技術を要するとのことでした。やむなく詰襟服となった次第ですが、製作にあたっては大礼服から型紙を起こし、写真の詰襟服姿をつぶさに検証し、複製にいたったものです。実用性重視が特徴となっています。

本多静六は林学者、公園設計者、地域振興アドバイザー、オピニオンリーダー、人生哲学者、投資家、慈善事業家等々、様々な側面をもった魅力に富んだ人物です。記念館では、そういった本多静六の素顔を垣間見ることができます。最寄りの駅からバスで二〇分、更に徒歩で一〇分という不便な場所にあります。一見の価値はあります。のんびりと緑豊かな田園に囲まれた本多静六記念館の屋上からは、本多が子どもの頃見たであろう富士山や秩父連山、浅間山、日光男体山、筑波山など関東平野を取り囲む山々を望むことができます。

## 久喜市立 三箇小学校

本多静六博士の母校

# 本多静六博士と 子どもたち



## 大先輩に学ぶ

さんが  
三箇小学校は、久喜市菖蒲町に位置しています。子どもたちは毎朝、本校のシンボルでもある昇降口前の松の木と本多静六博士の胸像を見ながら登下校しています。本多静六博士が自分たちの学校の卒業生であるということに誇りをもって、学校生活を送っています。

### 総合的な学習の時間



総合的な学習の時間を『夢の森タイム』と称し、3年生以上の学年で、静六博士の偉業や関連することと結びつけ、環境や世界に目を向けた学習を進めています。

### 本多静六博士週間



本校では、静六博士誕生の日をはさみ、1週間の本多静六週間を設けています。そこでは、1年生から6年生まで、発達段階に応じた静六博士に関する道徳教材を使って授業を行っています。全校朝会では、静六博士の逸話や努力の姿について校長講話を実施しています。

### 本多静六博士資料室にて



静六博士資料室の公開を行っています。彩の国教育週間には、6年生が静六博士について調べたことを地域の方や下学年に説明する機会を設けています。地域の方ともふれあえるよい機会となっています。



本多静六博士の人生訓『人生即努力、努力即幸福』を常に念頭に置き、子どもたちは日々様々な取り組みの中、あきらめず努力することの大切さを学んでいます。本校の大先輩、郷土の偉人本多静六博士に学び、自らを高めていくことを願っています。

# 生誕百五十年記念誌の刊行に寄せて

湘南工科大学 准教授 本多 博彦

曾祖父本多静六が亡くなったのが昭和二十七年のことですので、現在、本多家には静六を直接知る者はおりません。最後の孫だと言われていた父本多健一も六年前に亡くなり、静六の思い出を語ってくれる人物は周りからはいなくなりました。静六は我々子孫に多大な書籍や資料残してくれましたが、その生涯における足跡は、埼玉県、特に出身地久喜市菖蒲町において、詳細に収集・紹介をして頂いております。そのような訳で、ここでは現在の本多家が、静六の処世をどのように引き継いでいるか、祖母が語っていた、静六のあまり知られていない一面などについて少しばかり紹介させて頂きたいと思えます。

静六の「人生の処世術」や「お金や蓄財」に関する書籍などの帯や解説に、よく「莫大な財産を築いた億万長者などと書かれている」ことがあり、ではその子孫もきつと相続でたくさん引き継いでいるのだろうと思われ、かもしません。実際はそんなことはなく、静六が所有していた埼玉の山林地帯や多くの株式も、ほとんどすべてを国や県、社会事業に寄付しております。特に秩父の山を青少年の奨学金基金に提供したことは、よく知られています。「余分な財産は子孫のためにならない」というのはもともとで、確かにそれだけの財産が残っていれば金銭的に裕福であったかもしれませんが、現在においては維持や相続で大変な苦労をすることは間違いありません。静六が申し立てた「幸福な人生とは、精神的なゆとりを持ち、自分の目的を果たすために必要な財産があ

れば良いというものです。そのためには、お金の大切さを知ったうえで勤儉貯蓄する必要があり、持て余す財産や、お金儲けのための運用はむしろ弊害の方が大きいというのは、静六が当時考えていた通りだったと思います。有名な「四分の三引き貯金がございませうが、我が家では、給料からそのまま四分の一を定期預金などに置き換えることはないので、年間を通して収入の四分の一以上は利回りの低い（安全性の高い）運用に充て、利益が出たら有利な事業投資に充てる」ということを実践しております。時代は変わりましたが、見栄を張ったり、物質的贅沢のための散財はせず、精神的な贅沢（趣味を持ち、愉快に過ごす）をせよ、という曾祖父の教えは受け継いでいきたいと思っております。

静六の有名な名言「人生即努力、努力即幸福」については、よくネット上などで、努力することで成功が手に入り、成功が幸福をもたらすと解釈されている場合がございます。世の中には努力しても、目的が果たせなかつたり、報われない場合が多くあります。時間が大分経った後に認められる場合もあります。静六をよくご存じの皆さまならおわかりのように、静六は成功するために努力せよと言っているのではなく、自分自身が成長し、仕事が面白くなり、人生そのものが楽しくなる、それが幸福であつて、それらは全て努力をすることで得られるものであると申しています。これは努力しようとする意思と実行することこそが必ず自分にとってプラスになり、結果を見て努力が叶ったとか、無駄だったとか

評価してはいけないことだと思えます。何も疑うことなく努力する「志」を持ち続けること、努力する行為そのものが幸福なのだと思います。

最後に、私の祖母（峰子）が静六について話してくれたことを、こっそりお教えいたします。静六は質素節約をモットーとし、食事に関しても野菜中心の小食だったと思われておりますが、実はグルメなところもあったようです。祖母が嫁に来て間もないころ、食事の準備をしているところに静六がやってきて、「峰子さん、今晚の食事は何ですか。この前の天ぷらは美味しかったですね。とんかつもよかったですね。」と言われ、結局それはリクエストであり、全て揃えなければならなかったそうです。当時は書生さんも多くいて、たくさんのおかずを用意しなければならなかった状況ではありましたが、年がら年中貧食で、天ぷらも野菜だけではなかつたようです。全国各地の知人からその地の産物を沢山頂き、それを宅急便のない時代でしたので知り合いにお配りするのが大変な仕事だったと話していました。でもそのおかげで大勢の家族は食に困ることなく、楽しい団圓を過ごせたそうです。

この度は、静六の生誕百五十年記念として、顕彰する会に記念誌を企画して頂き、子孫としてたいへん光栄に思っております。静六の業績や処世訓については、我々本多家以上に詳しく研究され、今の時代になつても様々なメディアで取り上げられていることは、たいへんうれしく、またありがたく思っております。

# 本多静六博士を顕彰する会の歩み

本多静六博士を顕彰する会会長

柴 崎

一

## はじめに

平成四年（一九九二）、菖蒲町（現久喜市菖蒲町）では、本多静六博士（以下「博士」）の没後四十年の節目の年にあたり、博士に名誉町民の称号を贈るとともに「本多静六博士を記念する会」（以下「記念する会」）を設立し、日本初の林学博士誕生の地として広く全国に向けて情報の発信に努めてきました。

その後平成十九年（二〇〇七）五月、本会では博士が日本林学界のみならず、日本の近代化に寄与した業績を広く顕彰するため「記念する会」から「顕彰する会」に組織・名称を改め、全国的な情報発信組織としての充実をはかり現在に至っています。

## 一 記念する会の設立と「本多静六通信」の発行

菖蒲町では平成四年（一九九二）五月十一日、博士の没後四十年にあたり、地元（現久喜市菖蒲町河原井）出身で、日本最初の林学博士となった本多静六の功績を顕彰するための組織として「本多静六博士を記念する会」を設立しました。設立当初は事務局を役所内に設置し、主に「本多静六通信」（以下「通信」）の発行を中心に顕彰事業に取り組んでは

いました。通信は年に一、二回発行していますが、平成二十八年末現在、二十四号を数えます。通信では、博士に関連した内容を平易に、かつ一般の方に親しみをもって読んで頂けるよう編集に心がけています。通信は久喜市のホームページからも閲覧、ダウンロードできるようになっています。

また、顕彰する会では平成十三年（二〇〇一）九月より町（市）との共催により、市民を対象に博士ゆかりの地を訪問し、博士の偉業を顕彰しています。毎回多くの方にご参加頂いています。平成二十八年度は日比谷公園と明治神宮を見学しました。

## 二 生誕地記念園と胸像の設置

平成四年十月、顕彰事業の一環として埼玉県協力を得て、博士の生誕地に近い国道二二二号沿い広さ約四百平方メートルの敷地内に「本多静六博士生誕地記念園」が整備され、本多家をはじめ関係者を招いての除幕式が盛大に開かれました。

園内には、秩父市中津川にある埼玉県有林産の石を台座に使った博士の胸像のほか、日比谷公園の「首かけイチヨウ」の接ぎ木があります。

その後、記念園にある胸像と同じものが、母校の

三箇小学校、彩の国ふれあいの森、更に菖蒲総合支所庁舎前にも設置され、現在に至っています。なお、これらの胸像の基となった石膏像は本多静六記念館に展示されています。

## 三 没後五十年記念事業

平成十四年（二〇〇二）は博士の没後五十年を迎え、菖蒲町では実行委員会を設けて記念事業の実施に取り組みました。主な事業としては、記念式典・記念講演を実施し、講師として上智大学名誉教授の渡部昇一氏による「人生の達人・本多静六」と題する講演が行われました。

また、記念式典にあわせ没後五十年記念誌『日本林学界の巨星 本多静六の軌跡』を刊行しました。この他、町のホームページへの本多静六コーナーの開設、ゆかりの地訪問として、博士の留学先であったドイツ国ターラント町への親善訪問団の派遣なども行いました。

## 四 没六十年記念「本多静六記念館」の整備

平成十二年（二〇〇〇）四月、菖蒲町生涯学習文化センター（現菖蒲文化会館）愛称・アミーゴ）二



博士ゆかりの地訪問  
平成13年より市（町）と共催  
により毎年実施している。  
写真は日比谷公園（平成28年  
11月）



顕彰する会で編集・作成した  
「本多静六パンフレット」



「本多静六通信」創刊号（平成4年10月）から第24号（平成28年3月）まで。  
第10号は特別号として、明治23年のドイツ留学時の模様を記した「洋行  
日記」の翻刻版を掲載している。

階の一室（約二十平方メートル）に「本多静六記念室」が設置されました。室内には、年譜や肖像画をはじめ、自筆の教科書、ドイツ留学時の「洋行日誌」、更に博士が設計に携わった全国各地の公園等の写真等が展示されました。

その後菖蒲町は、平成二十二年（二〇一〇）三月に久喜市、栗橋町、鷲宮町と合併し、新「久喜市」となりました。合併後も博士は久喜市の偉人として、「本多静六博士の顕彰」が総合振興計画にも位置付けられ、平成二十五年（二〇一三）四月、博士の没後六十年記念事業として、「本多静六記念館」が久喜市菖蒲総合支所の五階（旧菖蒲町議会議場）に久喜市によって整備されました。開設当初より顕彰する会の会員がボランティアで週三回展示の案内を行っています。

### 五 顕彰する会の役員研修の実施

顕彰する会では、役員の資質の向上を目的に、現地研修として、平成二十一年（二〇〇九）から毎年一回ゆかりの地訪問を行っています（費用は個人負担）。これまでに、水戸偕楽園、野田市清水公園、小諸市懐古園、東京大学秩父演習林、川越市伊佐沼公園、東京大学千葉演習林、須坂市臥竜公園などを視察してきました。  
また、会では役員が中心となって、市職

員（文化財保護課）の指導のもとに、新出資料の整理や虫干し作業等を行っています。

### 六 博士の森づくりとその管理

「本多静六博士の森づくり」は、埼玉県が「彩の国みどりの基金」を活用して、新たに平地林を造成する事業です。その第一号の森が菖蒲町南部産業団地公園用地の一角〇・二ヘクタールに造成されました。苗木はその地にあった樹種、コナラ、クヌギ、クスノキ等が選ばれ、苗木の育成は、久喜市立三箇小学校の児童で組織された「緑の少年団」によって約二百四十本を育苗、また地域住民の方々の協力により、約四百九十本が植栽され、平成二十一年（二〇〇九）埼玉県第一号の「本多静六博士の森」が誕生しました。

森の維持管理については、埼玉県、菖蒲町（現久喜市）、顕彰する会の三者協定によって、菖蒲町と顕彰する会が担当することとなりました。

会では、これまで役員が中心となって除草などの世話をしてきましたが、現在七年の歳月を経て六、七メートルまで成長し立派な姿をみせています。今後も市民の憩いの場となるよう維持管理に協力していきたいと思っています。

### むすびに

以上、顕彰する会の発足からこれまでの主な活動内容について記しましたが、会ではこれからも博士の顕彰活動について、広く、深く進めたいと願っておりますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。





久喜市立三箇小学校の「寄せ植えの松」(表紙の写真解説)

三箇さん小学校の校庭には優美な姿を誇る赤松5本からなる「寄せ植えの松」があります。同校の創立100周年記念誌(1973)には、「本多先生の植込みの松」と紹介されています。この松は明治33年(1900)に本校舎が完成し、校名を琢玉尋常高等小学校と改称した年に、本多静六の指導により植えられたと伝えられています。同校の創立95周年の会報(1968)には、当時のこととして「本多博士によって校庭の風景が築かれ県下の羨望するところでありました」と記されています。

開園当時の日比谷公園(裏表紙の写真解説)

日比谷公園の設計は主に本多静六によるもので明治36年6月1日に開園しました。本多は日比谷公園の設計を契機に、全国各地の公園の設計に携わるようになりました。

裏表紙の写真は明治36年(1903)の開園当時の雲形池、鶴の噴水を写したものです。この噴水は、明治、大正、昭和、平成と114年を経た今でも変わらぬ姿を伝えています。  
(公益社団法人東京都公園協会所蔵)

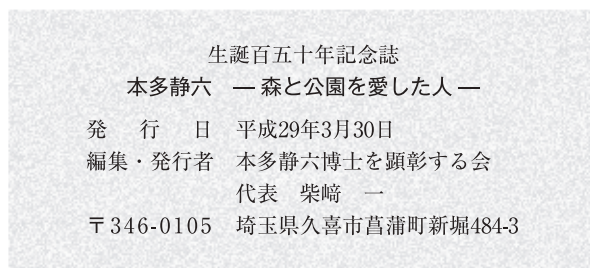
### ◎本多静六記念館◎

〒346-0192 埼玉県久喜市菖蒲町新堀38

久喜市菖蒲総合支所5階 電話0480-85-1111(代)

開館日等:日曜日～金曜日(9:00～17:00)・入館無料

休館日:土曜日、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



<http://www.city.kuki.lg.jp/> (久喜市ホームページ・本多静六コーナー)



日比谷公園雲形池 鶴の噴水（明治36年・1903）



現在の雲形池の様子（平成29年・2017）